
NARUTO 紅と碧の運命を変える転生者達

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO 紅と碧の運命を変える転生者達

【Nコード】

N0977U

【作者名】

松上

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公達。転生することになってチート能力を貰った。本来、死すべき存在の者の運命を変える。

転生先は『NARUTO』だ！！

主人公達が原作に介入する事でどんなイレギュラーが起こるかは、誰にも分からない……

ブローグの巻1（前書き）

どうも、松上です！

まだまだ未熟者ですが、暖かい目で見守ってください！！

プロローグの巻1

side???

初めまして、俺の名前は南雲幹なぐもとしきって言うんだ。

年齢は今年で十六歳、家の近くに在る賢くも馬鹿でも無い普通の高校に通う男子高校生だ。

まあ唯一他の皆と違うと言ったら、母さんの方の祖母ちゃんが外国人（何処の国の人かは忘れた）で俺はクォーター、そして祖母ちゃんの遺伝子を濃く受け継いだのか髪の毛の色は紅なのだ。

後違うとしたら、赤ん坊の頃からずっと一緒に居る幼なじみが居る位だな。

と言つてもよく在るギャルゲーみたいに幼なじみが女子ではなくスツゲエウザい男子の幼なじみなんだけどな。

「幹、凄く可哀想な俺にお金と言う名の物を恵んで呉れ。」

そして俺は今、そのウザい幼なじみと一緒に高校に歩いて向かっているんだ。

此奴の名前は涼野拓海すずのたくみ、俺の赤ん坊からの幼なじみで俺と同じクォーター。

まあ違うと言えば、拓海の髪の毛の色は俺と対象で碧色なのだな。

「何故お前に金を恵まなきゃならんのだ。それにお前、昨日給料日だろうが。」

「フツ、給料など『NARUTO - 疾風伝 -』の新作ゲームと『魔法少女リリカルなのは』のグッズで全て消えたわ！！（キリッ）」

まあ拓海の話の内容から分かる様に、此奴はかなりのヲタクなのだ。

黙っていればクォーターのイケメンなのに、喋る内容がヲタク知識なので女子から残念がる声をよく聞く。

はあ、黙ってればイケメンなのに、黙ってればイケメンなのに。大事な事なので二回言っただ、それだけ残念なんだよ。

「俺は既に銀行に預けて、今財布の中に入ってるのは二万だけだ。お前に貸せる金は持ってたねエよ。」

俺が拓海にそう言うと、拓海はこの世の終わりの様な顔をして道の真ん中で――orz状態になった。

昔から此奴は面倒臭くて、一々反応してたら身が保たないので拓海を置いて学校に行こうとした。

するとこの辺りに住んでいる主婦達や出勤中のサラリーマン達、更には登校中の小中学生が俺を冷たい目をしながらヒソヒソ話をし始めた。

あゝ、何で馬鹿（拓海）と居ると碌な事が起きないのかな？！？
此奴は歩く幻想殺し（イマジンプレイカー）かよ！？

「拓海、学校に行ったら五千円貸すから今直ぐに立ち直れ！！」

「流石赤ん坊の頃からの幼なじみだ！俺は貸して呉れると信じてたぞ！」

俺が拓海に自棄になってそう言うと、拓海は一瞬にして立ち直って俺の肩に手を回してきた。

……此奴、俺を騙していたな。

学校に行ったら高町流O・H A・N A・S H Iをしてやる……

「し、死亡フラグが建った様な気がする……！」

ヘエ、中々良い勘してるじゃん、まあO・H A・N A・S H Iするのには変わり無いけどな。

.....

.....

.....

.....

「チツ、赤信号に捕まっちゃったぜ……！」

「誰の所為で渡れなかったと思ってるんだよ……」

拓海が赤信号を睨みながらそう言ったので、俺は拓海をジト目で身ながらそう言った。

此奴は歩いて来る可愛い他校の女子生徒に声を掛けたり、歩いて来るイケメンに喧嘩を売ったり、金の無いのにコンビニに入ったり、ホントに此奴は面倒臭い。

何でこんな面倒臭い奴と幼なじみなんだろ……？

俺は少し落ち込みながら前を見ると、赤信号なのに横断歩道を渡っている茶髪の少女が居た。

俺は体が反射的に走り出していて、少女の右腕を掴んだ。

「お前は死にたいのか……！」

「ふえっ？」

俺が少女に大声でそう言ったが、少女は状況を理解していない顔をして俺の顔を見てきた。

クソッ、速く戻らねェと!!

「幹!!」

俺が少女を抱っこしようとした時、拓海が走って俺達の所にやって来た。

「急いで戻ろ『ブー!!!!』な!？」

拓海が話している途中に、4トトラックが俺達に向かって突っ込んで来た。

その瞬間、周りの動くスピードが急に遅くなって今迄の記憶が頭の中に流れてきた。

そうか、これがフラッシュバックって言う物か……

そして俺は目を瞑ると、感じた事の無い痛みが体を襲って来て意識を失った。

プロローグの巻1（後書き）

次回は女の子の正体が証されます！！

楽しみに！！

プロローグの巻2（前書き）

広ーーーーーい心で幹を見てください!!

間違っても警察に電話しないように!!

お願いします!!ort

ブローグの巻2

side 幹

幹「知らない天井だ・・・」

俺はエヴァのパイロットのシンジの言葉を言った。

幹「何処だよ、此処は・・・」

俺は上半身を起こし、周りを見渡した。

白い部屋以外の言葉が見つからないくらいの部屋だった。
そして、前には俺が助けようとした女の子が泣いていた。

幹「なあ、何で泣いてんだ？」

??「グスッ・・・え？」

女の子は泣きながら俺に顔を向けてきた。

幹「大丈夫「ごめんなさい!!」お、おい!!?」

俺が話していると、女の子が泣きながら俺に抱きついてきた。

幹「ど、どうしたんだよ!？」

??「ごめんなさい・・・ごめんなさい」

女の子は同じ言葉を繰り返した。

取り敢えず、落ち着いてもらったために左手で女の子を支え、右手で

女の子の頭を撫でた。

??「え？」

女の子は顔を上げて俺を不思議そうな顔で見た。

幹「落ち着いたか？取り敢えず泣き止めよ。可愛い顔が台無しだぞ。」

俺はポケットに入っていたハンカチで女の子の涙を拭き取った。

??「あ、あのー!!」

女の子は泣き止んで、真剣な顔で俺を見てきた。

俺も真剣な顔をした。

??「あ、あの、お願いがあるんですが・・・」

幹「何だ、言ってみろ。俺が出来る範囲ならやってやる。」

??「じゃ、じゃあ頭を撫でてくれませんか？」

なんだ、そんな事が・・・

幹「嗚呼、いいぜ。」

俺は優しく女の子の髪を撫でた。

??「ふにゃー／／／／／」

女の子は気持ち良さそうに俺の胸に顔を埋めた

拓海「このリア充がー！！！！」

横から拓海の叫び声が聞こえた。

凄く煩い。

女の子は拓海の怒鳴り声を聞いて怯えてしまった。

まずは、

幹「拓海・・・」

拓海「何だ、このリア充！！裏切り者！！！！」

俺は満点の笑顔で

幹「一回死んでこい。五千枚瓦正拳！！！！」

俺は女の子を抱えたまま、ワンプのジンベエの技みたいに拓海を殴った。

拓海「グフツ・・・なんでおれだけ・・・」

そう言って気絶した。

幹「ごめんな、怒鳴り声を出したけど本当は優しい奴なんだ。許してやってくれな。」

俺は女の子を撫でながらそう言った。

??「は、はい／／／／／」

女の子は顔を赤くしながら了承してくれた。

幹「ありがとな。それで此処は何処なんだ？」

俺が聞くと女の子は悲しい顔をした。

俺は女の子を抱き締めた。

多分、今の説明を見て警察に電話しようとした奴は偉い。

だが、俺だけは目を瞑ってくれ。

頼むな！！

??「あ、あの／＼／＼／＼」

幹「大丈夫だって、俺はどんな事を言っても怒らない。拓海・・・怒鳴り声を出した奴と何時も居たから、怒ることが無くなったんだ。だから、話してごらん。」

拓海の行動はムカつく要素が多い。

最初は怒っていたが、最近は怒っても無駄なのが分かったので、呆れて過ごしていた。

なので、拓海耐性（トラブル耐性）はかなりついている。

??「あ、あの、ずっと抱き締めてくれませんか？その方が落ち着くので・・・」

幹「了解。」

俺は女の子を両手で抱き締めた。

警察はマジで勘弁な。

??「あ、ありがとうございます／＼／＼／」

幹「どういたしまして、それで此処は何処なんだ？」

??「此処は生と死の狭間です。」

・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

幹「つまり、俺達は現実では死んだけどまだ完全に死んでないんだな？」

??「はい、貴方は賢いですね。」

まあ、拓海と一緒に居たら誰だってこうなるさ。

幹「それで、君は誰なんだ？俺は南雲 幹だ。」

何時までも名前が分からないまま話すのは嫌だから。

??「私は神様です。」

幹「分かった、神様以外の名前は？」

神様「えっ、疑わないんですか？」

疑うつて・・・

幹「こんな可愛い女の子が嘘を言うわけないだろ。だから、疑わない。」

神様「ありがとうございます！！今までの人達は私を見ると変な目で見てきたり、私を信じない人ばかりでしたから！！」

皆、一つ目に出てきた人を警察に連絡するんだ。
いいか、俺との約束だぜ！！

幹「そりや大変だったな。それで、名前は？」

神様「名前は・・・ありません。」

無いだと！？

拓海「だったら俺が付けてやるぜ！！」

拓海、お前は何時復活した？

神様「嫌です！！付けてもらうなら、私は幹さんに付けてもらいたいです！！」

拓海「リア充への道がどんどん広がっていくorz」

拓海は神様の言葉を聞いて落ち込んだ。

神様「幹さん、付けてくれますか？」

神様は顔を傾け聞いてきた。

幹「ちよつと待ってくれよ・・・」

神様の特徴は

- 1・サイドテールの長い茶髪
- 2・キュートの目 これ重要
- 3・可愛い顔 これも重要

ってあれ？この子顔って見た感じ

幹・拓海「なのは？」

拓海と声が重なった。

だが、似ている。

あの魔法少女の高町なのはに似てる、寧ろ本人かも。

神様「なのはですか？ありがとうございます！！今日から私はなのはって名乗ります！！」

まあ、本人が気に入ってる見たいだし良いか。

幹「それで、俺達はどうなるんだ？」

俺はなのはに聞いた。

なのは「私が幹さん達を殺してしまったようなものですから、幹さん達を転生さ「よっしゃー！！！」まだ、説明中なのに・・・」

幹「マジで俺の親友が迷惑を掛けたな。ごめんな。」

俺はなのはを撫でながら謝った。

なのは「は、はい／／／／／」

良かった、許してくれるみたいだな。

拓海「それでなのは、どの世界に転生するんだ!？」

拓海、喜ぶのは良いが少し落ち着け。

なのは「えっ・・・と、『NARUTO』の世界に転生しんよっしやああああああ!?!?!?」むう!?!」

拓海、なのはがまだ話してるだろ・・・

俺はなのはを撫でた。

なのは「そ、それで、何か、ほ、欲しい力とかありますか?／／／／／」

所謂チートっていうやつか・・・

拓海「はい!?!?!俺は、NARUTOに出てくる全ての技を使ったい!?!あと、写輪眼と白眼を使えるようにしてくれ!?!それから、ONE PIECEの技を使えるようにしてくれ!?!以上だ!?!」

チートだな・・・

なのは「・・・幹さんは欲しい力がありますか?」

欲しい力が・・・

幹「俺も拓海と一緒に良いよ。あつ、でもワンピースはいらない。代わりに、BLEACHに出てくる斬魄刀を使えるようにしてくれ。」

余りチートだったら、化け物を見るような目で見られるからな。

なのは「分かりました！！・・・能力を受けました！！」

早いな、まあ神様だから早いのかもれないがな・・・

そういえば

幹「なのははこれからどうするんだ？」

神様なら仕事しないといけないんだろうけど、一応聞いておいた。

なのは「・・・神様は自分のミスで人間を死なせてしまった時、その人間の部下になるんです。」

なんだよ、そのふざけた決まりみたいな物は・・・

上条当麻じゃないが、その決まりをぶち殺すか？

でも、なのはが死なせたのは俺と拓海だよな？

こういう場合はどうするんだ？

なのは「・・・私は幹さんの部下になりたいです。」

部下って、俺はそう言う身分は作りたくないんだよな・・・

拓海「幹、俺は構わねえぜ。俺はそう言う柄じゃないしよ。まっ、

お前もだけだよ!!」

拓海は笑いながら俺に言ってきた。

拓海はこういう所があるから好きだ（友達として）。

まあ、なのはも俺が良いって言ってるしな・・・

幹「分かった、俺に付いてこい。だがこれは守れよ。“俺の部下じゃなくて、家族として俺に付いてくること”。後敬語はやめろ、転生したら多分同い年になるんだから。分かったか？」

なのは「はい!!あつ・・・えっと、分かった!!」

良く出来ました。

俺はなのはの頭を撫でた。

拓海「俺も何時か、ヒナタと・・・頑張るぜー!!!!!!」

隣で拓海が気合いを入れていた。

なのは「それじゃあ転生しまーす!!」

そうなのはが言っていると俺は意識を失った。

プロローグの巻2（後書き）

次回は転生して少し経った後の話です。

勿論、まだ原作入りはしませんが・・・

楽しみに！！！！

第壱話の巻（前書き）

転生して数年後の話です

ご都合主義が含まれますので、広い心を持ってもらえたら幸いです

第壱話の巻

sideモトキ

よう、俺の名前は南雲 モトキだ。

え？モトキの部分が漢字じゃないって？

嗚呼、NARUTOの世界に転生したので下の名前が片仮名になっていた。

まあ、名前は一緒だから気にはしてないがな。

転生して既に三年が経った。

飛ばした理由は聞かないでくれ。

それは置いといて、俺は今ある場所に向かっている。

「ようモトキ、こんな時間に何処行くんだよ？めんどくせえけど聞いとくぜ。」

前から俺に話し掛けてきた。

この喋り方の奴は皆も分かるだろう。

モトキ「親友の家だよ、シカマル。それから、面倒臭いなら聞くなよ。」

俺の親友の奈良 シカマルだ。

IQが忍者の中でもズバ抜けている天才忍者だ。

まあ出会いは偶然なんだけどな・・・

シカマル「親友？・・・嗚呼、タクミの家か？」

タクミは今日の晩、大切な事をするから家に行けないんだよな・・・

モトキ「否、今日はなのは家に行くんだ。」

そうそう、一応説明しとくぜ。

拓海は涼野一族に転生して、涼野 拓海から涼野 タクミになった。
なのは名字が高町なのだ。

凄くご都合主義だが、気にしないでくれ。

シカマル「高町の家か？しかし、お前と高町って仲良いよな？付き合ってたのか？」

シカマル「って本当に三歳か？」

歳とか誤魔化してんじゃねえか？

綱手様みたいに・・・

モトキ「バーカ、なのはとは只の友達だ。それに、なのはが俺の事を恋愛の対象として視てると思うか？」

時々・・・否、必ず会った時は抱き付いてくるがあれば『けいおん！』の平沢 唯みたいな感じで抱き付いているんだろう。

シカマル「（マジで鈍感だよな・・・）じゃあまた今度遊ぼうぜ。
チヨウジ達とよ。」

心の中で失礼な事を言われた様な気がするが・・・

モトキ「嗚呼、その時はナルトやサスケも誘おうぜ。」

説明するぜ。

ナルトとサスケとも親友だ。

ナルトは原作と違いかなり落ち着きがある。

サスケはブラコンではないし、親友の事を大事にしている。

こんな性格になったのは、俺とタクミが関わったからこうなった。

シカマル「そうだな、それじゃあまた今度な。」

そう言っただけで歩いて行った。

モトキ「嗚呼、じゃあな。」

そう言っただけで俺も歩きだした。

なのは「モトキくーん!!!」

ガバッ!!!

モトキ「なのは、毎回言っただけだと思っただけに抱き付かないでくれ。」

俺はシカマルと別れた後、なのはの家に向かった。

そして、なのはの家に着いてインターホンを鳴らしたんだ。

NARUTOの世界にインターホンがある事は聞かないでくれ。

話を戻すが、俺がインターホンを鳴らして少し経ってから玄関が開いた。

俺が挨拶しようとしたら誰かが抱き付いてきた。

それがなのはだった。

なのは「嫌だ!!! 私はモトキ君に抱き付きたいんだもん!!!」

こんな感じに何時も離れてくれない。

まあ嫌われてないから良いんだが、こんな事をしていたら付き合ってると思われてしまう。

なのはにも、好きな奴が現れると思う。

俺と付き合っていると噂されたら、なのはは好きな奴と一緒に居られなくなる。

なので、抱き付いてきたら注意しているんだが全く聞いてくれない。

「あら、モトキ君だったんのね。いらっしやい。」

扉の奥から一人の女性が現れた。

モトキ「どうも、ももこさん。取り敢えず、なのはに離れるよう言ってくれますか？」

外見ははつきり言つて『魔法少女リリカルなのは』に出てくるなのはのお母さん、高町 桃子さんだ。

父親は高町 士郎だ。

兄弟が居ない事以外は原作と同じだな。

士郎さん達は和菓子屋を経営している。
時々ご馳走になつてる。

ももこ「それは無理よ。私達の教育は、なのはの意志を尊重してるから諦めて」

随分楽しそうですね・・・

モトキ「はぁ・・・取り敢えず、家に上がっても良いですか？」

多分・・・否、絶対になのはは離れてくれないだろう。
なので、俺は諦める事にした。

ももこ「良いわよ 今日店はお休みだったから暇してたのよ」

はぁ、今日の晩までは時間が潰せそうだな・・・

何故時間を潰したいのかと言うと、今日は・・・

・・・

日向一族の事件が起こる日だからだ

第貳話の巻（前書き）

原作を余り覚えてないので無理矢理な所がありますが、広い心で見てください

第貳話の巻

sideモトキ

モトキ「なのは、食べれないから離れてくれ。」

なのは「じゃあ私が食べさせてあげるよ。」

モトキ「なら食べん。」

なのは「ええー。」

よう、今俺はなのはの家に来て時間を潰している。

なのはの家は和菓子屋なのだが、最近は洋菓子を作り始めたのだ。

なので、元々人気だった翠屋（店の名前）が更に人気になった。

なので、遊びに来た時はお菓子をご馳走してくれる。

だが今日は、なのはが俺の腕にずっとしがみ付いてるので食べれない。

なのはって本当に元神様？って疑いたくなる。

ももこ「今日はタクミ君は一緒じゃないのね？」

モトキ「はい、今日は用事があるみたいなので・・・」

タクミは今晚の準備をしている。

俺もそれに参加するが、正直な話をする俺はBLEACHの斬魄刀を使えるので準備をしなくてもいい。

タクミは望んだ能力が能力なので準備をしないといけない。

しろう「しかし、なのはは本当にモトキ君が好きなんだなあ。」

モトキ「あつ、お邪魔してます。それからしろっさん、なのはが俺の事がlikeなんです。決してloveではありませんから。」

この世界で英語が伝わるのも深く考えないでくれ。

しろっ・ももこ・なのは「（・・・鈍感）」

今、心の中でバカにされたような？
まあ、気にしないがな。

モトキ「そうだ。なのは、分かってるか？」

なのは「えっ？・・・あつ、分かってるよ。」

絶対忘れてただろ・・・

ももこ「あら、何の話？」

モトキ「大人には言えない子供の秘密の会話。」

しろっ「そういえば、君は子供だったね。」

しろっさん、俺を何だと思ってたんですか？

モトキ「俺は正真正銘の子供ですよ。」

なのは「そうだよ、お父さん！！モトキ君は子供だよ！！」

そんな雑談をしながら時間を潰した。

深夜

モトキ「……………管理局の？」

タクミ「白い悪魔。」

モトキ「タクミだな。準備は出来たのか？」

タクミ「嗚呼、十分過ぎるくらい準備をした。家は影分身に任せてあるしな。」

俺とタクミは今、日向ヒナタの家の前の木に隠れている。

理由は、今晚に日向ヒナタが誘拐されるからだ。

原作ではヒナタは救われるが、ネジとの関係が最悪になる。それを防ぐために俺達は見張っている。

モトキ「……………管理局の？」

なのは「白い悪魔。」

モトキ「なのはも準備は出来たのか？」

なのは「バッチリだよ！家に影分身を作ってきたしね。」

俺達が夜会う時は合い言葉を言って、相手確かめる。

まあ、言い出しっぺはタクミなんだがな・・・
合い言葉もタクミの趣味全開だが・・・

タクミ「・・・！？来たぞ。」

タクミの言葉を聞いて、俺となのはは息を殺す。

視線の先には、五、六人程の忍者だ。

正直な話、相手が何処の忍者とか関係ない。

殺さなければ、この事件は無事に終わる。

原作では相手忍者を殺してしまったから、ややこしくなった。
俺達はそんなへまはしない。

タクミ「ふう・・・白眼！！」

タクミは白眼を使い、中の様子を見た。

俺達はNARUTOに出てくる全ての技が使える。

なので、写輪眼や白眼も例外ではない。

だが、俺達はこれを公表していない。

だって、面倒臭いから。

言い忘れていたが、万華鏡写輪眼のようなデメリットがある技でも、
デメリットなしで使える。

・・・チートだな。

タクミ「モトキ、なのは、そろそろ出てくる。準備をしてくれ。」

俺となのははタクミの言葉を聞いて準備し始めた。

そして、少し経つと中から忍者達が出てきて何処かに行った。

タクミ「さ、追い掛けよう。ヒナタ救出作戦の開始だ！！」

俺はタクミとなのはの手を掴み、瞬歩で忍者達を追った。

「ぐははは、簡単な任務だったな!!」

おっさんが笑いながら任務の事を話している。

「確かに、こんな任務に何でこんな大人数でしなくちゃいけないんだ？」

別のおっさんが任務の愚痴を言った。

「この子、マジで可愛い。・・・襲いたくなるぜ。」

髭を生やしたおっさんがヒナタを見てそう言った。

「お前・・・流石に引くぞ。」

ここの忍者たちに比べればまだ若い忍者が、髭の生やしたおっさん忍者に言った。

「いいじゃねえか!!マジで襲いたい!!」

こいつら、付けられてるのが分かってねえのか？
まあいいさ。

早く片付けよ。

モトキ「螺旋丸!!!」

俺は髭を生やした・・・面倒臭いから髭忍者だ。

髭忍者は俺の螺旋丸をくらい、回転しながらぶっ飛んだ。
ヒナタはその時、空中に飛んだがタクミがお姫様抱っこでキャッチした。

「だ、誰だ!？」

髭忍者の仲間が俺に殺気を放ちながら聞いてきた。
タクミの方を見ると、ヒナタをお姫様抱っこ出来て泣いていた。
なのはは、タクミを見て引いていた。

モトキ「はぁ・・・お前等に教えるつもりはねえ、よ!!！」

俺は千鳥を右手に発動させ、声を出した男に放った。

タクミ「ワリイ、ヒナタの寝顔に見惚れてた。明日、何か奢るから許せ、よ!!！」

タクミは俺の横に来てそう言い、腕から炎を出した。

タクミ「火拳!!!!！」

タクミの能力の一つにONE PIECEの技を使える力がある。
悪魔の実も例外ではない。

まあ、この力はデメリットがあるが・・・

モトキ「分かった。明日、翠屋の洋菓子を買ってもらう。・・・
なのはは?」

俺は突っ込んできたおっさんを、殴りながら聞いた。

タクミ「ま、マジかよ・・・お金足りるかな・・・なのはならヒナタの所に居てもらってる。話してんだから邪魔すんな、蛍火!!」

タクミは蛍火を使って、おっさんを燃やした。

「おい、相手はガキだ!!直ぐに殺せ!!!!」

リーダーらしきおっさんがそう言うと、他のおっさん達が突っ込んできた。

モトキ「タクミ、これを片付けたら明日の奢りは少し自重してやる。」

正直一瞬で倒せるんだが、面倒臭い

タクミ「分かった、直ぐに終わらせる!!」

タクミは笑顔でそう言い、右手の親指を口でくわえた。

タクミ「ギア・・・3!!」

タクミはそう言うと、指に空気を入れた。そうすると、タクミの右手が巨大化した。

「な、何だ!?!」

「くっ、逃げろ!!」

「ば、化け物だあ!!」

おっさん忍者達は逃げ出した。
だが、逃げるのが遅すぎた。

タクミ「ゴムゴムの・・・巨人の銃^{ギガントピストル}!!!!」

『ぎゃああああああああ!!!!?』

タクミの“ゴムゴムの巨人の銃”をくらい、おっさん忍者達は悲鳴をあげ気絶した。

モトキ「早くなのは達の所に戻るつぜ。」

タクミ「約束はまもれよ?」

モトキ「考えておく。」

タクミ「考えんなよ!!!守れよ!!!」

そんな事を話ながらなのは達の所に向かった。

第貳話の巻（後書き）

次回はキャラ設定です!!

お楽しみに!!

第参話の巻（前書き）

原作を全然覚えてないので無理矢理な所があります

今回も広ーーーーい心で見てください！！

第参話の巻

sideモトキ

タクミ「はぁ・・・ギア3は体が小さくなるから嫌なんだよなぁ・・・はぁ」

タクミは一歳児並の身長で言ってきた。

タクミが使ったギア3は、自分の体を巨人族の体のように巨大化出来る。

だが、これはあくまでメリットの面だ。

メリットがあればデメリットもある。

ギア3は、使用するとその使用時間と同じ時間だけ体が縮む。

俺達の体は元々小さいので、縮む量が少ない。

だが、縮んでしまう。

モトキ「タクミ、嫌いぞ。それに、使った時間が短いから直ぐに戻るだろ？」

タクミ「そうだがよ・・・おつ、体に戻った！」

タクミの体が元の大きさに戻った。

モトキ「それじゃあ、スピードを上げるぜ。」

タクミ「おう！」

そう言っただけ俺達はスピードを上げ、なのは達の所に向かった

俺達がなのは達の所に向かうと、誰かがなのは達に近づいていた。敵か？

取り敢えず、戦つとくか・・・

モトキ「千鳥ッ！！！」

俺は直ぐに左手に雷のチャクラ、千鳥を発動させてなのは達に近づいている誰かに放った。

なのは達に近づいていた奴は俺の声を聞いて、即座に俺の方を向いて構えてきた。

その構えは、日向一族の構えだった。

俺はその構えを見た瞬間、千鳥を木に放った。

・・・危つく怪我させちまう所だった。

「・・・何故君は術を木に放った？」

日向一族の大人が俺に聞いてきた。

モトキ「同じ木の葉の人間だからですよ。」

俺がそう言つと、日向一族の大人が驚愕した顔になった。

「ま、まさかとは思つが、君達がヒナタを攫つたんじゃないだろうね？」

そんなわけないじゃん。

モトキ「違いますよ。俺達は救出したんですよ、おっさん忍者達から。それに、もし俺達が攫つたなら俺達は既に木の葉に居ない。わ

ざわざ攫った人間を此処で放置するわけ無いでしょ。」

俺がそう言っと、日向一族の大人は頷いていた。

「確かにな・・・なら君達にお礼を言わせてくれ、ありがとう。」

そう言つて頭を下げてきた。

モトキ「止してください。俺達は人として当たり前的事をした迄です。」

これでヒナタとネジの仲は良くなる、ネジの父さんは死なないで済む、最高じゃねえか。

「そういえばまだ名前を名乗ってなかったね。私の名前は日向 ヒアシ。ヒナタの父親だ。君達は？」

・・・100%ネジの父さんは死なないね。

モトキ「俺の名は南雲 モトキです。歳は三歳です。」

俺が名前を言つとヒアシさんは驚いた顔をした。

ヒアシ「き、君は三歳なのか？なのに、あの様な技を・・・君は天才だな・・・そういえば、もう一人は何処に行ったんだ？」

あれ？タクミは何処に行ったんだ？

なのは「モトキ君、タクミ君はヒナタちゃんとあそこで話してるよ。」

なのはが俺の隣に来て教えてくれた。

此処でなのはの力について話しておくぜ。

なのはの力は、元神様なので全ての力を持っている。

だが、俺達の力になっていない力は使えない。

何故なら、俺達が能力を望んだ時に力を俺達に与えたからだ。

なので、NARUTOの技、BLEACHの武器、ワンピースの技は使えない。

まあ、その力が無くても十分過ぎるくらい力がある。

だから、はっきり言って俺達よりなのはの方が強い。

これでなのはの能力についての話を終わるぜ。

ヒアシ「君は・・・翠屋の。」

凄いよ、日向のトップまで名を知られてるよ。

その内、世界に進出しそうだな・・・

なのは「あつ、日向のおじさん!!」

日向のおじさん・・・

流星なのはだ。

日向一族のトップですらおじさん扱い。

ヒアシ「しかし、ヒナタを攫った忍者達はどうしたんだ?」

多分、否、絶対に殺しに行くんだろうな・・・

だが、そんな事はさせない!!

既に手は打ってある!!

モトキ「俺とタクミ・・・ヒナタと楽しく会話してる奴です。俺と

タクミの影分身の術で、火影様の所に連れていきましたから安心して下さい。」

ヒアシ「・・・明日、家に来てくれ。火影様を交えて君達とちゃんと話がしたい。来てくれるかい？」

まあ、別に良いか。

モトキ「良いですよ、俺は。なのはは？」

なのは「うん、私も良いよ！！日向のおじさん、明日お菓子を持っていくねー！！」

なのはに聞くとなのはも良いようだ。

しかし、明日翠屋のお菓子が食えるのか・・・
楽しみだ。

ヒアシ「ありがとう。・・・彼は来てくれるのかな？」

ヒアシさんはタクミを見ながら聞いてきた。

モトキ「大丈夫です、俺が責任を持って連れていきますから。・・・あいつ、どれだけ話すんだよ。なのは、少しタクミとO・H A・N A・S H Iしよっぜ。」

少し、反省してもらわないとな・・・

なのは「良いよ、私も戦いたかったかしね・・・レイジングハート、召喚。」

なのははレイジングハートを召喚した。

魔王、降・臨！！

モトキ「ヒアさん、少し拷問・・・じゃなくて、O・H・A・N・A・S・H・Iしてきます。直ぐにヒナタを連れてきますね。」

ヒアシ「あ、嗚呼、程々に、尚且つヒナタに見せないでくれ。」

モトキ「大丈夫です。ヒナタには見せませんから。じゃ、行こうかなのは？」

なのは「そうだね。」

俺となのははタクミが居る場所に向かった

タクミ「〜〜ですよ！」

ヒナタ「そうなんだ、面白いね。」

・・・死刑けつてーい！！

モトキ「・・・おい、タクミ。」

俺はタクミに話し掛ける。

タクミ「何だよ、人が楽しく話し・・・て・・・る・・・に。」

楽しくだと？

人の苦勞も知らないで・・・

モトキ「なのは、頼む。」

俺はなのはに言う。

なのは「ちゃんと残しててよ？」

モトキ「当たり前だ。だから、頼むな。」

俺がそう言うと、なのはは頷いてヒナタの所に向かった

なのは「ヒナタちゃん、向こうでお父さんが居るから私と行こうね！」

ヒナタ「は、は、はい！！」

ヒナタは大きな声で返事をした。

うん、素直な子は好だぞ。

あくまで、likeの方だが・・・

なのはは、ヒナタを抱えてヒアシさん所に向かった。
さて、

モトキ「タクミ、お前は少し調子に乗りすぎた。だから俺達が尋問・
・O・H A・N A・S H Iしてやる。有り難く思え。」

俺は親指を噛み切り、印を結んで口寄せした。

モトキ「口寄せの術、氷輪丸。」

タクミ「あ・・・ああ・・・」

タクミは怯えて動けなかった。

なのは「お待たせ、まだ尋問・・・O・H A・N A・S H Iしてない？」

なのはが俺の横に来て、レイジングハートを構えて聞いてきた。

モトキ「嗚呼、二人でタクミを教育しよう。」

なのは「そうだね、それじゃあ・・・」

俺達は笑顔でタクミに言った。

モトキ・なのは「O・H A・N A・S H Iしようか？」

タクミ「ぎゃ、ぎゃあああああああ！！！！！！？」

タクミの悲鳴が木の葉の森に響いた。

side 三代目火影

火影「ふう・・・漸く資料が纏め終わったのお。」

ワシは肩を叩きながら椅子にもたれた。
九尾が封印されて早三年が経った。

ナルトは木の葉の皆から嫌われているようじゃ。
じゃが、ナルトは毎日楽しそうじゃ。

南雲 モトキ、涼野 タクミ、高町 なのは・・・
この三人のお陰でナルトは笑顔で居られる。
本当に嬉しい限りじゃ。

「火影様。」

突然、窓の外から声が聞こえた。
ワシは窓を見た。

「夜遅くすいません。他里の忍者です。この忍者達は、日向一族の宗家の娘を誘拐しようとしてました。ですが、俺達がいっつらを倒したので安心して下さい。日向一族の娘も無事です。ですから、こいつらの処理を任せます。」

窓から沢山の忍者を連れてきた子供がそう言った。
そして、もう一人の子供が現れた。

「火影様、明日、日向一族の宗家の家に来てください。そこで、大切な話があります。それでは、俺達はこれで。」

そう言うと二人は消えた。

火影「南雲 モトキに涼野 タクミ・・・何故あやつらが影分身の術を・・・それに、この大人数の忍者を意図も簡単に・・・明日は大変そうじゃな・・・すまぬ、誰か居らぬか？」

ワシがそう言うと暗部が現れた。

火影「こやつらを牢屋に閉じ込めておけ。決して、自害などはさせないようにだ。」

暗部『はっ！！』

そう言いつと、暗部は他里の忍者達を連れて消えた。

火影「・・・ふう、明日の為に早く眠るとしよう。」

ワシは立ち上がり、眠るために家に帰った。

第参話の巻（後書き）

次回はキャラ設定です

お楽しみに！！

キャラ設定の巻（前書き）

キャラ設定

ネタバレは無いと思うぜ！

ただ、考えたらモトキとタクミ以上のチートだよな、なのはって
気にしちゃダメ・・・気にするって

キャラ設定の巻

主人公

名前

南雲 なぐも モトキ

性別

男

年齢

ナルト達と同じ

性格

面倒臭がり・冷静・S（タクミに対して）

容姿

イナズマイレブンに出てくる南雲 晴也

身長

平均的

体重

平均的

能力

NARUTOの術を全てデメリット無しで使える

BLEACHの武器を召喚し、使える

始解・卍解も使える

（但し、なのはが特典として勝手にBLEACHに出てくる技を使える様にしてしまった。本人は既に気付いている）

備考

転生する前までは普通の中学生だった

拓海とは幼なじみ

トラブルメーカーの拓海と常に居たので、拓海耐性（トラブル耐性）がついてしまった

ある日拓海と学校に向かっている途中、なのはが信号を見ず横断歩道を渡っていたので助けようとするがトラックに退かれ死んでしまう自分が死んでも、なのはが神様だと知っても驚かなかった

そして、ナデポやダキポをしてなのはにフラグを建てるが、本人は気付いていない

拓海とNARUTOの世界に転生する

既に原作ブレイクをし、ナルトやサスケとも親友

夢は、暖かい家族をもち平和に過ごす事

主人公の相棒（笑）

名前

涼野 すずの タクミ

性別

男

年齢

ナルト達と同じ年

性格

お調子者・元氣・落ち込みやすい

容姿

イナズマイレブンに出てくる涼野 風介

身長

平均

体重

平均

能力

NARUTOに出てくる術をデメリット無しで使える

ONE PIECEに出てくる技を全て使える

備考

転生する前は幹と同じく中学生だった

しかしオタクだった

幹と同じで、なのはを助けようとするが死んでしまう

転生する前も転生した後も、調子に乗る

その度にモトキから突っ込みを受ける

ヒナタが好きで、頑張って話し続けてフラグを建てた

夢は、ヒナタと結婚すること

ヒロイン

名前
たがまち
高町なのは

性別
女

年齢

ナルト達と同じ

性格
元気・落ち込みやすい・心配性・甘えん坊
モトキにだけ

容姿

魔法少女リリカルなのはに出てくる高町 なのは

身長

平均より少し低い

体重

平均より少し軽い

備考

元神様

現実世界に遊びに行っちゃってしまい、幹と拓海を殺してしまった

その事をかなり悔やんでいたが、幹の優しさのお陰で元気になる
この時に、幹の事が好きになる

能力は、全てのアニメ・漫画・ドラマ・ゲーム・小説などに出てくる全ての力を使うことが出来る

但し、幹と拓海が持っている力は使えない
何故なら、なのはが二人に力を授けたから

幹と拓海が束になつて戦つても勝てない
主人公を超えるチート

キャラ設定の巻（後書き）

次回は話し合い

お楽しみに！！

第四話の巻（前書き）

ナルトの口調が難しいです

おかしかったら教えてください

変な所・誤字・脱字があれば教えてください

第四話の巻

sideモトキ

俺は今、日向家へ向かっている。

昨日の戦いの事の説明だ。

本当は話したくないんだが、これからの事を考えると日向家と火影様に俺達の秘密を（嘘を付くが）話したほうが良いだろう。

なのはとタクミとは別々に行くことになっている。

なのはは、翠屋の手伝いがあるので少し遅れてくるから。

タクミは、昨日俺となのはが拷問・・・O・H A・N A・S H I し
たから病院に行つてからくるらしい。

まあタクミなら、『ヒナタの為なら！！』と言つて体に鞭を打つて
でも来るだろう。

なので必然的に俺は一人で事情を話さなければならない。

モトキ「はあ・・・面倒臭い」

「どうしたんだつてばよ、モトキ？シカマルみたいな事を言つて・・・」

俺の後ろからそんな声が聞こえた。

語尾に『く』だつてばよ』を付ける人物は一人しか居ない。

皆も分かるだろ？

答えは・・・

モトキ「今から日向家に行かないといけないからだよ、ナルト。」

金髪の髪、頬には三本の髭、九尾の人柱力、四台目火影の波風 ミ
ナトとうずまき クシナの息子である人物、うずまき ナルトだ。

ナルト「お、お前、な、何かヤバい事でもしたのか？」

ナルトは動揺しながら俺に聞いてきた。

モトキ「んなわけないだろ。何でヤバい事一々しなきゃいけないんだよ。俺はオカマ蛇忍者じゃないぜ。」

オカマ蛇忍者は・・・説明しなくても大丈夫だよな？

皆はあいつの説明を聞きたいか？

俺は皆が『No!!』と答えることを信じてるぜ!!

ナルト「た、確かに・・・それじゃあさ、それが終わったら公園に来てくれってばよ!!今日は皆で新しい忍術を見せ合っただってばよ!!サスケがすごい事を言ってたから、凄い術を見せてくれるはずだってばよ!!」

ナルトは凄い笑顔で言ってきた。

ナルトは原作と違いかなり性格が変わった。

里の奴らは一部を除いてナルトの事を化け物を見る目で見ているが、ナルトはその目を気にしなくなった。

一部とは、俺の家族・なのはの家族・タクミの家族・いのの家族・シカマルの家族・チョウジの家族・キバの家族・シノの家族・サスケ・三代目火影様だ。

まあ此処に日向家など、どんどん増えていくだろう。

否、増やす!!

モトキ「分かった。なのはとタクミも日向家に呼び出されてるから、終わったら三人で行くぜ。」

ナルト「分かったってばよ！！待ってるからな！！」

ナルトはそう言って公園に向かって走りだした。

さて、俺もそろそろ日向家に向かうか。

俺は日向家に向かって歩きだした。

モトキ「・・・改めて見るとデカイな。」

俺は日向家を見てそう呟いた。

流石は木の葉最強の一族と言われるだけのことはある。

さて、

モトキ「ふう・・・白眼！！」

俺は白眼を使い、日向家の中に居る人物を見た。

火影様にヒアシさん、それからヒナタ。

後は日向家の人達が数人居た。

暗部は居ないようだ。

ダンゾウに目をつけられなくて良いがな。

余り待たせるのも良くないな。

俺はインターホンを鳴らした。

前にも言ったが、この世界にインターホンが存在する事は余り深く
考えないでくれ。

頼むな！

『どうぞ。』

多分使用人？の人だろう。
俺は日向家に入ってた。
勿論、白眼は解除してだ。

俺は今、三代目火影様とヒアシさんの三人で一つの部屋に居る。
二人の視線が俺に集中しているので、かなり胃が痛い。
だが、話さないとこの痛みは治まらないだろう。
頑張ろう。

モトキ「まずは自己紹介をさせてもらいます。」

俺がそう言つと二人は頷いた。
凄い胃が痛い。

モトキ「俺の名前は南雲　モトキです。歳はナルトやヒナタと同じ
年です。性別は男。」

二人が聞きたいのはこんな事じゃない。
俺やタクミ、なのはの力のことだ。
俺は一呼吸置いて話した。

モトキ「この事は絶対に他言無用でお願いします。俺は二人を信じ
て話しますから。」

ダンゾウやオカマ蛇忍者などに俺達の力が知られたら大変なことになる。
俺達だけなら瞬殺出来るが、ナルト達が入質になったら手も足も出
ない。

俺は二人を真剣に見た。

二人はゆっくり頷いてくれた。

良かった、二人は約束を必ず守ってくれる数少ない忍者だ。

だから、安心できる。

モトキ「それじゃあ今から話しますので、途中で話し掛けないでください。質問は説明し終わったら聞きますので。

俺とタクミ、なのはは異常者です。この世に生まれてからこの世の知識は全て頭の中に入ってきました。だから、俺達は赤ん坊の頃から話せましたしチャクラも扱えました。ですが、この世の人間は異常者を軽蔑する。ですので、俺達は力の事を隠してきました。ですが、知識は豊富なので歩く事や技を使う事は簡単に出来ました。ですが、俺達の異常は止まる事を知らず違う世界の知識まで頭に入ってきました。俺とタクミは、うちは一族の“写輪眼”や日向一族の“白眼”などを使えます。なのはは、チャクラを使う事は出来ませんが、ですので、忍術・幻術・体術を使う事は出来ません。ですが、なのはの異常は俺達を凌駕します。俺達が持っている違う世界の知識は一つですが、なのはが持っている違う世界の知識は億を超えます。だから、なのはは違う世界の力を使えますので、この世の全ての忍者がなのはに立ち向かって勝てません。

俺達の力の事は以上です。

次に何故隠していたかを話します。

俺達は生まれた時に、この世の知識を全て入ってきたと言いました。ですので、オカマ蛇忍者や他里の忍者に命を狙われると分かったのが俺達はこの力の事を秘密にしました。ですが昨日、この家の娘である日向 ヒナタが誘拐されそうになりました。なので俺達はこの力を使いヒナタを助けたわけです。

以上で俺の話が終わります。」

俺はそう言って一度深呼吸をする。

沢山嘘を付いたが、これ位嘘を付かないと面倒になってくるからな。二人の顔を見ると、二人の顔はかなり暗かった。まあ話の内容が内容だからしょうがないがな・・・

モトキ「すいません、ナルトと約束があるので帰っても良いですか？」

俺が居たら大人の話し合いが出来ないからな。
なのは達は、ナルト達の所に行く時に迎えに行けば良いか。

ヒアシ「あ、嗚呼。・・・そ、そうだ、ヒナタも一緒に連れて行ってやってくれ。タクミ君の事をかなり気に入ったみたいだからね。」

おめでとう！

・・・エヴァの最終回が頭をよぎった。

うん、間違いじゃないだろ。

タクミはリア充の仲間入りかぁ。

俺は永遠に仲間入りすることは無いだろうがな。

モトキ「分かりました、それじゃあ帰ります。ヒナタを呼んでくださいね。」

俺はそう言って立ち上がり、一度頭を下げて部屋から出た。
出た途端胃の痛みが治まった。

マジで最高

・・・スマン、は要らなかつたな。
男がやったって気持ち悪いだけだな。
ハア・・・恥ずかしい。

俺は玄関に向かった。

第四話の巻（後書き）

次回は原作キャラがフル出演！！

まあ出ないキャラも居ますがね・・・

次回もお楽しみに！！

第伍話の巻（前書き）

今回は原作キャラが沢山出ます

ですがキャラ崩壊してます・・・サスケが

キャラの口調などで変な所があれば、教えてください

誤字・脱字もあれば教えてください

第伍話の巻

sideモトキ

俺は、ヒナタと一緒にナルト達が居る場所に向かっている。

さて、火影様は一体どんな事をしてくるんだろうか？

確か、下忍のチームを考えるのも火影様だったような気がする。

だったら、俺とタクミとなのはが同じチームになるだろうな。

だが、担当上忍は誰になるんだ？

特別上忍のアンコさんか？

それとも、暗部の大和さんか？

・・・分かん。

・・・よく考えたら、この時期に救える奴は沢山居るじゃん！！

明日、火影様にでも頼んでみるか！！

確か・・・ダメだ、思い出せねえ。

此処は既に原作から離れた世界。

原作通りに進む可能性は0%に近い。

だったら、トコトン原作ブレイクをしてやる！！

「モトキ君ー！！」

「ヒーーーーナーーーーターーーー！！！！」

前から物凄いスピードで走ってくる二人の男女。
うん、もう誰だか分かった。

「モトキ君ー！！！！！！」

「ヒーーーーナーーーーターーーー！！！！！！」

ガバッ！！！！

二人の男女が、俺とヒナタに抱き付いてきた。

ヒナタは、余りにも突然の事だったので顔を真っ赤にして倒れそうになった。

俺は、俺に抱き付いてきた女の子を抱えた状態でヒナタに抱き付いている男を蹴った。

モトキ「何してんだよ、タクミ！！」

ドガッ！！

タクミ「グハッ！！」

タクミは、短い悲鳴を出し倒れた
変態には罰を与えないとな！

「やっぱりモトキ君は凄いね」

俺に抱き付いている女の子が言ってきた。

モトキ「だったら今直ぐに離れてくれ、なのは。」

なのは「いゝや」

俺に抱き付いている女の子、なのはに言うがやはり無駄だった。

はあ、本当にこの抱き付く癖は治した方が良さそうだな。

タクミ「ゲホッゲホッ・・・おいモトキ！何で俺を蹴るんだよ!？」

タクミは俺を睨みながら聞いてきた。

ヒナタは、タクミの背中を撫でていた。

あんな事されても優しく出来るなんて、流石はヒナタだな。

モトキ「何でかって？お前がさっさと日向家に来ないから蹴ったんだよ。お前に文句を言える権利はない。分かったらさっさと立つてナルト達の待つてる場所まで行くぞ。」

俺は笑顔（、）でタクミに言った。

タクミは、何かに怯えたのかと思うくらい震えながら何度も頷いた。よく見たら、ヒナタも怯えてい頷いていた。

更によく見たら、お互い抱き締め合いながら頷いていた。

・・・ヒナタには、悪い事をしたな。

なのはは、物凄い笑顔だった。

俺は力オスな状況を理解しながら、ナルト達が待つている場所に向かった。

確か、木の葉の一番大きな公園だよな？

じゃないと、狭い場所で術を使ったら大惨事だからな。

ナルト「おっ！！やっと来たつてばよ！！遅いつてばよ、モトキ、タクミ、なのは・・・それから・・・日向の娘さん!？」

ナルトがそう言うのと、此处に居た皆が尻餅を付いた。

まあ説明しとくぜ。

俺はカオスの状況を乗り切って、無事に公園に来た。

俺の予想通り、木の葉の一番大きな公園に皆は集まっていた。

まあご都合主義なのは許してくれ。

取り敢えず、その行動は止めさせよう。

まるで、ヒナタが化け物の様に扱われてるみたいで気分が悪い。

モトキ「おい、皆立てよ。ヒナタが居たら不味い事でもあるのか？

ヒナタは、俺達の友達だ。だから、此处に連れて来たんだ。文句ある奴は居るか？」

俺はそう聞くが、誰も文句を言わなかった。

やっぱ皆は本当は良い奴なんだ。

ナルトを化け物を見る目で見る様な奴らや、オカマ蛇忍者達よりな。

モトキ「サスケ、お前が凄い術を見せてくれるんだっけ？どんな術なんだ？」

俺はサスケを見ながら聞いた。

俺が聞いている間に、皆は立ち上がって尻についた砂を払っていた。

サスケ「フッフッフ、聞いて驚け！！見て驚け！！俺は、遂に“火遁・豪火球の術”を使えるようになったんだ！！」

サスケは、胸を張りながら俺達に言ってきた。

・・・ヤベエ、原作を全然憶えてねえから忘れてた。

この時期だったのか？

まあ遅かれ早かれ使う術だから驚かないがな。

しかし、サスケの性格や口調がかなり変わった。

まあ俺とタクミとなのはの影響だな。

そのお陰で俺達との絆がかなり深い。

ナルトの事も邪魔者扱いしてないしな・・・

まあ良い方向へ成長しているから別に良いんだがな・・・

そう言えば、後少しでうちの虐殺事件があつたよな。

イタチさんと火影様にちゃんと話さないと。

そうじゃないと、サスケが原作通りの道を進んでしまう。

ナルト「本当かサスケ！？だ、だったら、俺達に見せてくれってばよ！！」

ナルトがサスケに目を輝かせながら近付いて言った。

本当に頼笑ましい光景だな。

原作を変えて本当に良かったぜ。

・・・そう言えば、波風 ミナトさんのチャクラとうずまき クシ

ナさんのチャクラが、九尾の封印式に組み込まれていたよな。

・・・もしかしたら、二人を救えるかもしれないな。

まあ俺とタクミの力じゃ無理だな。

なのはの力を借りないとな。

・・・本当は俺の力で救いたかったが、俺の力じゃ救えない。

はぁ・・・結局他人任せ、か

シカマル「どうしたんだ、モトキ？顔が暗いぜ？」

シカマルが俺の顔を見ながら聞いてきた。

ヤベエ、顔に出てたのか・・・

「モトキ、大丈夫？・・・ま、まさか、食べ過ぎ！？」

シカマルの言葉を聞いて、頬に渦巻きのマークがあり、少しポツチ
ヤリしている男の子が聞いてきた。

ポツチヤリって言えば、皆は分かるよな？

モトキ「大丈夫だ、シカマル。それからチョウジ、俺は食べ過ぎなんかはしない。」

そう、秋道 チョウジだ。

「そうだぜ！モトキはお前みたいにガツガツ食わねえよ！だろ！モトキ！」

ウザイ位のテンションで子犬を頭に乘せており、頬には赤い逆三角形のマークをした男の子が俺の肩に手を回して言った。
皆は簡単に分かるだろ？

モトキ「キバ、耳元で叫ぶな。痛いからよ。」

そう、犬塚 キバだ。

「モトキの言う通りだ。お前の声は耳に響く。何故なら、お前の声が大きいいからだ。」

独特の喋り方をし、サングラスを掛けている男の子が、チョウジの後ろから現れた。

こいつも皆は分かるだろ？

モトキ「シノの言う通りだぜ、キバ。もう少し声のボリュームを下げてくれ。」

そう、油女 シノだ。

・・・あれ、なのはとタクミとヒナタは何処に行った？

俺は居なくなつた三人を探した。

「なのはなら、トイレに行くって言つてたわよ。タクミとヒナタは・・・あそこでイチャイチャしてるわよ。」

そう教えてくれたのは、少しデコが広くて、ナルトより薄い金髪をしている女の子が言つてきた。
この子の事も皆は分かるだろ？

モトキ「そうか・・・ありがとな、いの。」

そう、山中 いのだ。

よし、タクミを拷問・・・ゲフンゲフン、O・H A・N A・S H I
してくるか。

サスケ「モトキ、俺にタクミを拷問・・・O・H A・N A・S H I
させてくれ。」

サスケは笑顔で、だが目は笑っていない顔で俺に言つてきた。
サスケもタクミに切れてるな。

よし、俺はサスケを援護するか。

モトキ「分かつた。サスケ、殺つてこい。俺が援護するからよ。」

俺も笑顔でサスケに言った。

サスケは、直ぐに印を結んで空気を目一杯吸つた。
そして、それを吐き出した。

サスケ「火遁・豪火球の術!!」

サスケが今日見せてくれる筈だった術の“火遁・豪火球の術”を放った。

だが、威力が少し足りない。

だから、俺は直ぐに右手に螺旋丸を作り出した。
作る時に風遁のチャクラを練り込んでな。

そして、それをサスケが放った“火遁・豪火球の術”に投げた。
そうすると、炎の威力が爆発的に上がった。

ヒナタ？

なのはに頼んであるから大丈夫だよ。

そうすると、なのはがヒナタの横に現れてヒナタを担いでこっちに
来た。

そして、タクミは火遁・豪火球の術改（俺命名）を喰らった。

タクミ「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

タクミは悲鳴をあげなら倒れた。

俺達はタクミに黙祷した。

・・・惜しい男を失った。

後悔はしていないがな。

第伍話の巻（後書き）

次回はほのぼのした話になると思います

次回もお楽しみに！！

第六話の巻（前書き）

無事に書けた・・・

夏休みの宿題が凄く難しいです

正直、高校の夏休みの宿題を舐めてました

もしかしたら、更新出来ない日があると思いますので御了承下さい

誤字・脱字などがあれば教えてください

第六話の巻

sideモトキ

俺とサスケは、タクミに拷問・・・ゲフンゲフン、O・H A・N A・S H Iした後、皆と一緒に近くの小川に移動した。

え？タクミ？

俺が足を持って引きずってるよ。

おんぶ？

何故タクミの為に、俺がおんぶしないといかんだ？

タクミが悪いのだから、これで良いんだ。

まあタクミの事は置いておいて、何故小川に移動したのか説明するぜ。

皆にチャクラをコントロールしてもらう為だ。

アニメや漫画でもやってた、あの“木登りと水上歩行”やってもらうからだ。

まあ今日中に水の上を歩く修業が出来そうなのは、シカマルといの・ヒナタだろう。

サスケとキバとシノは、チャクラを練りすぎるだろうから無理だろう。

ナルトとチョウジは、チャクラを余り練らないだろうから無理だろう。

シカマルは多分、「メンドクセエ」と言って木登りしかしらないだろうが・・・

それに比べて、いのとヒナタはチャクラのコントロールがこのメンバーの中で上手い。

なので、俺はこう予想した。

タクミとなのは？

タクミは今だに目を覚まさない。

永眠してるんじゃないか？と思ったが、一応心臓が動いてるので大

丈夫だ。

なのはは、チャクラ自体持っていないのでこの修業には参加出来ない。まあ違う力を使えば、簡単に上れるらしいがな・・・

モトキ「それじゃあ、よい・・・ドン！」

俺が合図をすると、皆がダツシュして木に登りだした。

ナルト・チョウジ「イテッ!？」

俺の予想通り、ナルトとチョウジは直ぐに落ちた。

他の皆は、凄い勢いで木を登って行ってる。

サスケ・キバ・シノ「!？チッ!！」

また俺の予想通り、サスケとキバとシノはチャクラを練りすぎて木に弾かれた。

だが、キバとシノは知らないがサスケは原作以上に木に登っていた。他の皆は、俺が決めた高さ迄登っていた。勿論、いのとヒナタとシカマルだ。

ナルト「す、スツゲエ!！」

ナルトは、三人を見てそう言った。

キバとチョウジも、ナルトと同じで三人に関心していた。

サスケとシノは、三人を見ながらチャクラを調整しながら練っていた。

いの「モトキ、凄いでしょ!！」

いのが木から降りてきて、俺に近付いて言ってきた。

予想はしてたが、アカデミーに行っていないのに此処まで出来るのは凄いな。

俺はいのの頭を撫でた。

いの「え、エヘヘ／／／／／」

いのは、俺に頭を撫でられて顔を赤くしながら喜んでくれた。良かった、嫌がられると思った。

なのは「ず、ズルいよ、いのちゃん！も、モトキ君、私も撫でてよ！！」

なのはがそう言つて、いのの隣に来た。

女の子って撫でられるのが好きなのか？

後でナルト達に教えてやろう。

俺はそう思いながらなのはの頭を撫でた。

シカマル「モトキ、次は何をすれば良いんだ？」

シカマルが俺に聞いてきた。

その瞬間、いのとなのはがシカマルを睨み付けた。

Why?

モトキ「次は水上歩行をしてもらう。木登りより難しいぜ？」

俺がそう言つと、シカマルの顔が面倒クセエと言つ顔になった。確かに面倒臭いけど、これが出来たら凄く術を使うのに楽だぜ？そして、いのとヒナタとシカマルは小川に向かって行った。溺れられると嫌なので、影分身を一体出して付いて行かせた。

タクミ「う．．．う、うん、此処は？」

タクミが目を覚ましたみたいだが、また眠ってもらった。
俺はタクミの首をチョップした。

ドガッ！！

タクミ「あ．．．れ．．．」

タクミは気絶した。

タクミが起きると、皆が集中出来ないからな。
．．．誰か来たみたいだな。

モトキ「皆、少し用事が出来たから俺となのはとタクミは一時抜ける。」

俺がそう言つと、皆は頷いてくれた。

俺となのはは、タクミの足を掴んでその場を離れた。

此処なら良いだろう。

モトキ「此処なら誰も居ない。出てきたらどうだ？」

俺がそう言つと、目の前に狐の面を付けた忍者・暗部が出てきた。
コイツは．．．うん、カカシさんや大和さんじゃ無いな。

それじゃあ一体何の用だ？

・・・ダンゾウか？

「火影様がお前達三人を呼んでいる。今直ぐ火影様の所へ向かえ。」

・・・違った。

まあ火影様やヒアさんが言うわけ無いもんな。

しかし、火影様は俺達は何の用だ？

取り敢えず、行ったら分かるか。

俺となのはは、タクミの足を掴んだまま火影様の屋敷に向かった。

第六話の巻（後書き）

次回はモトキ達と火影様の話し合いです

次回もお楽しみに！！

第七話の巻（前書き）

バイトして、凄く疲れました

ハア、一日8時間労働はキツイです

誤字・脱字があれば教えてください

第七話の巻

sideモトキ

俺達は、暗部の伝言を聞いたので火影様の所へ向かっている。
向かっている途中、タクミが起きたので理由を話ながら走らせた。
火影様は一体、俺達に何の用なんだ？
はつきり言って、俺達はヒナタを助けた以外は何もしていない。
呼ばれる理由が分からない。

タクミ「言ってみたら分かるんじゃないか？」

タクミが俺にそう言ってきた。

・・・人の心を勝手に読むんじゃない！
心の中でタクミに突っ込みながら、俺達は火影様の所へ向かった。

モトキ「やつと着いた。」

俺達は、漸く火影様の家に着いた
タクミは少し不安そうに、なのははニコニコしながら、俺は内心焦りながら中に入った
さて、何の話をするのか？

『・・・は？』

俺達三人は、間抜けな声を出した。

俺達はお互いの顔を見合った。

俺達は今、火影様と向かい合わせになって立っている。（火影様は座っているが・・・）

そして火影様が言った言葉に俺達は驚いて間抜けの声を出した。

火影「お主達は、褒美を貰うだけの事をした。じゃから、お主達は何が欲しいのじゃ？欲しい物があつたら何でも言ってくれ。」

火影様はもう一度、俺達にそう言ってきた。

火影様がこう言ってる理由は、ヒナタを他里の忍者から護ったからヒアシさんがお礼をしたがってるらしい（と、なのはが念話で教えてくれた）

別にお礼が欲しくて、俺達はヒナタを護ったわけじゃない。

俺達がヒナタを護ったのは、皆が笑顔で過ごせる様にする為だ。

タクミ「俺達は別に欲しい物なんてありません。」

なのは「私達は、私達がしたかったからしたんです。」

モトキ「なので、俺達は褒美はいりません。」

火影「じゃがのお・・・」

俺達はそう言うが、火影様は納得がいかない顔をした。
・・・そうだ。

モトキ「火影様？」

火影「何じゃ？」

モトキ「その褒美、先延ばししてもらっても良いですか？」

俺がそう言っと、タクミとなのはは頭に？マークを浮かべ・火影様は驚いた顔をした。

モトキ「今はまだ（・・・）欲しい物はありません。ですが、将来に欲しい物が出てくるかもしれません。ですので、その時まで褒美を先延ばししてくれませんか？」

今の（・・・）俺には、欲しい物はない。

だが近い未来、俺には欲しい物がある。

だから、俺は火影様に言った。

火影様は少し頭に手を置いて考えていたが、少しした後頷いてくれた。

モトキ「ありがとうございます。」

俺は頭を下げて部屋から出た。

タクミとなのはも、俺の後にお礼を言っつて俺の後ろに付いてきた。

タクミ「モトキ、お前の考えは100%分かったZE！」

・・・タクミ

モトキ「オラッー!!」

ドスッ

タクミ「な・・・ぜだ・・・」

ドタッ

俺はタクミの腹を思いっきり殴って、タクミを気絶させた。
何故か？

お前のテンションがウザかったからだよ。

俺はタクミの足を持って、タクミを引きずりながらナルト達の所へ戻った。

なのはは、俺に抱き付いているが・・・

第七話の巻（後書き）

次回も日常の話です

次回もお楽しみに

第八話の巻（前書き）

日常編を書こうと思ったのに、全く違う話になってしまった・・・

何やってんだ、俺は？

そうそう、夏休みの宿題を本格的にしないといけない位やバくなりましたので、頑張つてします

もしかしたら、更新出来ない可能性があるので御了承下さい

第八話の巻

sideモトキ

火影様との話し合いから一週間が経った。

この一週間で起こった事などを説明するぜ。

まず一つ目、皆が水上歩行を完璧に出来てしまった。

・・・最初から凄い事を言ってしまったスマン。

でも、これは嘘・偽りの無い真実だから信じてくれ。

否、ホントに驚いたぜ。

いのとヒナタは、たった二日で水上歩行を完璧にしてしまった。

まあ、二人はチャクラのコントロールが上手いから予想通りって言うたら予想通りなだけだな。

シカマルも、面倒クセエを言いながらも三日で水上歩行を完璧にした。

シカマル自身、他の皆よりも頭が賢いのでチャクラの流れやコントロールの仕方を自分なりに見つけたんだろう。

この三人は今、タクミが新しい術を現在進行形で教えている。

まあ教えるって言っても、“分身の術”や“身代わりの術”といった基本中の基本の忍術ばかりだな。

サスケ・シノは四日で木登りを終えた。

その後は順調に水上歩行を終えた。

ナルトとチョウジは、・・・六日掛けて木登りを終えた。

水上歩行はそれの倍は掛かると予想していたが、一日で水上歩行を終えた。

・・・本当に謎だ。

何故木登りが六日も掛かったのに、木登りより遙かに難しい水上歩行を一日で終える。

二人は器用貧乏なのか？と疑いたくなる。

まあ修業の話はこれ位だな。

そうそう、サスケの兄さん・うちは イタチさんと昨日会った。
サスケの事を本当に可愛がっていた。

だからこそ、イタチさん、否、イタチさんと火影様達には説得しないといけないな。

“ うちのは虐殺事件 ”、これは原作通りには絶対に進めてはいけない、否、進めちゃダメなんだ。

イタチさんは、重い十字架を背負って生きていき、サスケに本当の事を斯隠して死んでしまう。

サスケは裏切らせないし、イタチさんも死なせない。

あの仮面野郎の思い通りには、絶対にさせない。

だから、俺は強くないといけない！

否、俺達は強くないといけないんだ！！

この世界で、俺達が居る限り、絶対・・・とは言えないが、可能な限り俺は目の前で苦しんでる奴を救う！

例え一人を救う為に世界が敵に回ったとしても！！

モトキ「・・・フウ」

俺は一度呼吸を整えながら右手で螺旋丸を作った。

俺は少しづつ、螺旋丸を大きくしていく。

そして螺旋丸は、通常の1.5倍位の大きさ迄大きくなった
そして・・・

モトキ「千鳥ッ！！」

俺は写輪眼を発動させ、左手で千鳥を発動させた。

俺は千鳥と螺旋丸をぶつけ合った。

バチィ！！バチィバチィバチィ！！！！

ドスッ！！ドスッドスッドスッ！！！！

モトキ「クッ！！か、必ずお、俺は強くなつて苦しんでる奴を救つてみせる！！た、例え、俺が死んだとしても！！！！」

俺はそう心に決めた決意を叫んで、修業を続けた。

sideタクミ

俺は“スケスケの実”の力で透明人間の状態になって、モトキの修業を見ている。

・・・モトキの奴、また俺に内緒で無茶ばかりしやがって。

俺はモトキの無二の親友なんだ。

モトキが苦しんでる中、俺は楽しい思いをして良い訳無い。

・・・モトキばかりに辛い思いをさせねえ、俺もモトキと同じ辛さを一緒に背負う。

一人で全部を背負うより、二人で、三人で、皆で背負った方が絶対に良い！！

タクミ「モトキッ！！」

俺は透明人間の状態を解除し、モトキの名を呼びながら走った。

ドッカーーーーーン！！！！！！

モトキが俺を見た瞬間、螺旋丸と千鳥が爆発した。

$$\vdots$$

•
•
•
•

-
-
-
-
-
-

[illegible]

え え え え え え え え え え
!! !! ! ?

な、何で爆発したの！？

お、落ち着くんだ、涼野 タクミ！！

お、落ちていて整理すれば、きつと答えが見つかる筈だ！！

モトキが螺旋丸と千鳥を合体させようと修業をする

俺はその光景を見て決意し、モトキの名を叫びながらモトキに近づく

モトキは俺を見た瞬間、螺旋丸と千鳥が爆発

お、俺の所為じゃん！？

タクミ「も、モトキー!？」

俺はモトキが居た場所に行つて、モトキの名を叫びながら辺りを見渡した。

だけど、誰も居なかった。

俺の頭の中に、一つの方程式が浮かび上がった。

モトキの死〓俺が原因〓なのは達に殺される

・・・マジでヤベエエエエエエエ！！！！！？

モトキ「おい、何してるんだよ？」

モトキが横に座って聞いてきた。

俺は“モグモグの実 モデルモグラ”の力を使って、地面を堀ながら答えた。

タクミ「お前を搜してるんだよ！！このままお前が死んでたら、俺は100%なのは達（主になのはといの）に殺される！！だから、お前を搜して・・・モトキ？」

俺は上を見上げて、モトキの名前を呼んだ。
すると、上からモトキが顔を覗かせた。

モトキ「何やってるんだよ、タクミ？」

モトキは溜め息を一回吐いて、俺を見てきた。

・・・ヨッシャアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

俺は死なずに済んだぞぉ！！

まあそれは置いといて・・・

俺はジャンプして、自分で掘った穴から出た。

・・・自分で言うのもなんだが、よくこんな深く迄掘れたよな。
絶対に20mはあるな、この深さは。

まあそれも置いといて・・・

タクミ「モトキ、俺も修業と一緒にするぜ！！答えは聞いてない！
！こればかりは絶対に聞いてもらうでえ！！分かったかな、モト
キ？お前ばかり良い格好はさせないからな！！」

俺は電王のリユタロス・キンタロス・ウラタロス・モモタロスの
口調を真似して、ポーズを取りながらモトキに言った。

するとモトキは、溜め息をまた一回吐いて「分かったよ。」と言っ
た。

溜め息ばかり吐いてると、幸せが逃げるぜ？

そう心の中で思いながら、ストレッチを始めた。

突っ込むのは明日、否、明後日、否、一週間後・・・気が向いたら
しよう。

取り敢えず今は・・・

タクミ「さあ、お互い強くなろうZE！」

モトキ「その無駄に高いテンションは止める。・・・だけど、強く
なる事には賛成だ！！」

誰でも救える位の強さ迄、ひたすら鍛える！！
ただ、それだけだ！！

第八話の巻（後書き）

今回はナルトと九尾の話を書きます（あく迄予定ですが）

次回もお楽しみに！

第急話の巻（前書き）

まだ原作は先だ・・・

頑張らないと！！

夏休みの宿題がまだ残ってる・・・

更新出来ないかもしれませんので、御了承ください

誤字・脱字があれば教えてください

第急話の巻

sideモトキ

俺は今、なのは・タクミ・ナルトと一緒に人気の無い山の奥に向かっている。

理由は、ナルトの中に封印されている九尾と和解する為である。

ナルトには、昨日の内に九尾の事や九尾の秘密・九尾が起こした事件の真相を話した。

ナルトに九尾の話をするのは掟に反するらしいが、俺にはその事を秘密にするのはダメだと思った。

理由も分らず毛嫌いされる。

俺がそんな立場だったら、凄く辛い。

タクミもなのはも同じ気持ちだったので、昨日俺達は話した。

最初は落ち込んでいたが、直ぐに元気になって俺達に感謝してくれた。

ナルトは原作より強い、心も力も。

そして俺達は九尾と和解したい事をナルトに話すと、ナルト自身も九尾と和解する事を望んだ。

だから俺達と一緒に来ている。

モトキ「・・・此処なら大丈夫だろう。」

少し開けた場所で俺は立ち止まって、皆にそう言った。

俺がそう言うと、タクミは影分身を百体出し、なのはは自分を中心に巨大な結界を張った。

タクミは暗部や他里の忍者が此処に来ない為に、なのはは忍者の攻撃を喰らっても良い様にだ。

俺はなのはに借りた（本人は授けると言っていたが俺が拒否した）力を使って、ナルトの精神世界に行きナルトと一緒に九尾を説得す

る。

何の作品の力かは知らないが、俺的には別に何の作品の力かは知らなくても良い。

九尾の所へ行ければ、デメリットが存在しても使う。

それだけ九尾と和解する事は、この世界で・ナルトにとって重要な事なのだ。

タクミとなのはがそれぞれ準備を終えたので、俺はナルトと向かい合わせになって座った。

ナルトも俺が座ったのを見て、ナルトも座った。

モトキ「ナルト、今から九尾が居る精神世界に行く。俺は力を使えば簡単に行けるが、俺一人じゃ九尾と和解出来ない。ナルト、お前が精神世界に来て俺と一緒に説得するんだ。」

俺がそう言うと、ナルトは真剣な顔で頷いた。

そしてナルトは目を閉じ、心を落ち着かせ精神世界に意識を落とすていった。

モトキ「タクミ・なのは、俺も今から九尾の居るナルトの精神世界に行く。だから、此处を頼んだぞ。」

タクミ「任せておけ。俺の力を使って、お前等には怪我一つさせねえよ。」

なのは「安心して！この結界は、例えば宝具を使われても壊れない位硬いから！」

俺がタクミとなのはにそう言うと、タクミとなのはは俺にそう言うてくれた。

俺は安心した顔をして、右手をナルトの右肩に置いた。

ナルトは、俺に右肩を触られても全く動かなかった。
既に精神世界に着いた様だな。

俺は目を瞑り、ナルトの精神世界に意識を潜らせた。

モトキ「・・・無事に着いた、よな？」

俺は水路が続く道に立っていた。

アニメや漫画では、此処の事を詳しく描かれていなかったから俺自身、此処に九尾が封印されているのか分からない。
でも、多分此処に封印されているのだらう。

モトキ「さて、どの道を進めば良いんだ？」

俺の前後左右に道がある。

うーん、どの道を進めば良いんだ？

俺がどの道に悩んでいると

グアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

ナルト「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！？」

前の道から、獣の様な鳴き声とナルトの悲鳴が聞こえた。

モトキ「この道か！！」

俺は全速力で前にある道走って、ナルトが居るであろう場所に向かった。

モトキ「ナルト!？」

ナルト「も、もときい!？」

俺がナルトの名を呼ぶと、ナルトが泣きながら俺に抱き付いてきた。

「・・・貴様か、ナルト以外に此処に来たガキは。」

大きい檻に封印されている大きな狐・九尾の妖狐が、俺を睨みながら言ってきた。

モトキ「嗚呼そうだ。俺の名前は南雲　モトキ、ナルトの親友だ。そして今日此処に来たのは、お前と話し合いをする為に来た。」

俺は九尾の目を見ながらそう言った。

第急話の巻（後書き）

次回は九尾と和解する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

第拾話の巻（前書き）

急いで書いたので、少し無理矢理な所があります

最初に謝つときます、ホントにごめんなさいorz

誤字・脱字があれば教えてください

第拾話の巻

sideモトキ

俺は九尾の説得と和解をする為に、なのはの力を使ってナルトの精神世界に来た。

そして俺とナルトの前には、牢に封印されている九尾が居る。

九尾は、俺とナルトに殺気を放ちながら俺達を睨んでいる。

その所為で、ナルトは泣きながら俺にしがみ付いている。

九尾と俺は、お互い殺気を放ちながら睨み合っている。

九尾「貴様、何故此处に貴様が来れた・・・此处には、そのガキしか来れない筈だ。」

九尾は殺気を緩める事無く、俺に聞いてきた。

全く、名前を名乗ったのに“貴様”って呼ばれるのかよ・・・

ナルトに至っては“ガキ”って呼ばれてるし・・・

名前で呼ばれないと、人は、俺達は何かと辛い感情が込み上げてくる。

だけど、九尾の人に対する接し方が酷くても文句は言えない。

何故なら、ナルトの母さんであるうずまき クシナさん、否、波風

クシナさんに封印されていた九尾は、無理矢理変態仮面忍者に外に出され、拳げ句の果てに変態仮面忍者に操られたんだからな。

だから、九尾は人間が憎いのかもしれない。

だが、全ての人間が変態仮面忍者の様な人間ではない。

ナルトは変態仮面忍者と違い、ちゃんと和解する為に此处に来たのだからな。

モトキ「俺の親友の一人に、他人の精神世界へ行ける技を持った奴が居る。俺はソイツに頼んで、九尾、お前と和解する為に俺とナル

トは此処に来た。」

俺が此処に来れた訳・此処に来た理由を、九尾の目を真剣に見ながらそう言った。

だが九尾は、俺の言葉を聞いて大声で笑いだした。

・・・笑われたってしょうがない、今は我慢してちゃんと和解しないと。

モトキ「お前が俺達人間を嫌う理由は、俺達は知っている。お前は、うちは マダラに操られた事で、人間を嫌う様になっただんどう？」

俺がそう言っていると、九尾は笑うのを止めて俺を見てきた。

ナルトも漸く泣き止み、俺から離れて九尾を見た。

ナルトは、何かを決意した様な顔で、九尾とちゃんと向かい合った。

ナルト「九尾、俺ってば、お前と仲良くしたいんだってばよ！今、人間全てを許せとは言わない。今も何処かで、人間は醜い争いをしている。・・・だけどよ、俺達は九尾、お前と和解したいんだってばよ！だから、俺と友達になろうぜ。な？」

ナルトはそう言いながら、九尾の牢の前迄歩いていった。

そしてナルトと九尾の距離は零になり、ナルトは九尾の頬を優しく撫でていた。

あの距離なら、何時でも攻撃されるかもしれないが、九尾はナルトを攻撃せず、目を細め気持ち良さそうにしていた。

原作と違い、九尾の心は完全に負の感情で一杯じゃなかったんだな。ちゃんと九尾にも、触れ合いの暖かさを知っていたんだ・・・

九尾「・・・全ての人間を許すつもりは無い。だが、ナルトとモトキ、そして外に居る二人の事は信用しよう。」

九尾は、ナルトに頬を撫でられながら俺達にそう言った。

ナルト「ホントか、九尾！？ありがとな、九尾！！」

ナルトはそう言って、九尾に抱き付いた。

ふう、まだ始まったばかりだけど、良いスタートは出来た。

少しずつ、少しずつ九尾が信頼出来る仲間を作れば良い。

俺はそう思いながら、ナルトと九尾の触れ合いを頬笑みながら見ていた。

第拾話の巻（後書き）

次回は、この話から少し時間が経った話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

第拾巻話の巻（前書き）

上手く皆さんに伝わったか、今でも不安です・・・

頑張つて書いてみましたが、変な所があるかもしれないので、その時は教えてほしいです

あつ、今回から地の文の書き方を変えましたので、これからはこの書き方で行くのでよろしくお願いします

誤字・脱字があれば教えてください

第拾巻話の巻

sideモトキ

九尾との和解から数年が経った。

あれからナルトと九尾は、日に日に仲良くなっていき二人で力を合わせて頑張つて修業している。

今では、俺も五割の力を使わないと勝てない位迄成長してくれた。そしてナルトは、ヒナタの妹であるハナビと付き合っている。

ナルトはよく日向家に行つてヒアさんに修業してもらつていて、その修業をしている姿にハナビは惚れてしまい、ハナビから告白してナルトはその告白にOKを出して、無事に二人は恋人同士になった訳だ。

ヒアシさんも、ナルトの事は凄く気に入っていて二人の仲を認めている。

ホント、あの時は何度も言っただけ・・・おめでとう、ナルト、ハナビ。

サスケは原作よりも速く写輪眼を開眼させた。だけど、この事は俺とサスケの秘密にしている。

イタチさんより速く写輪眼を開眼させた為、色んな人に注目されてしまうからだ。

まあサスケをイタチと比べる奴達が偶に居るが、サスケも気にしていないので俺もスルーしている。

後、写輪眼の勾玉はまだ二つだがそれでも十分強くて、ナルトの次に強い。

原作では、ナルトが力を付けて行つてそれに嫉妬して変態オカマ忍者の所へ行つたが、此処のサスケは原作とは違う。

明るく誰にでも優しく、出来ない事は人に素直に聞きに行く。ホント、良い方向に成長してくれてありがとな・・・サスケ。

他の皆も、たった数年で原作の自分を超える迄成長した。
チャクラのコントロールも上手くなり、今は疾風伝で使っていた術を使う為に修業している。

無印の時に出てきた術は、ナルトとサスケを含む皆、完璧にマスターした。

だけど、この事は俺達だけの秘密だ。

後、皆の事も九尾は認めてくれたので和解している。

最初に九尾を見た時は皆、腰を抜かしていたが触れ合っていく内に仲良くなった。

ナルトの事を誰も化け物扱いする奴は居らず、この事を知った時から皆は、ナルトとは今迄以上の絆で結ばれた。

何度も言うが、ホントに良い方向に皆は成長している。

タクミは・・・まあ、成長した・・・と思うよ、多分。

まあ真面目に修業してたから、多分強くなったと思うよ。

・・・タクミの今迄の数年間って、ヒナタとイチヤイチャしてた事しか記憶に無いんだよな。

あつ、良い忘れてたけど、ヒナタはマジで強くなったよ。

何故言い切れるかって？

だってこの前、タクミが偶々女の子と話していると「タクミ君、少し私とO・H A・N A・S H Iしようか？」って言ってたから。

この言葉を言っている時点で、心も体も強くなったでしょ。

二人の仲も、ヒアさんは認めている。

ヒアさんって、原作より凄く優しいんだよな、こう考えたら・・・

なのはは、俺とタクミが100%の力を使って戦いを挑んでも一分で俺達二人を倒す強さ迄成長しちゃった。

・・・なのはの奴、俺達を軽く凌駕するチートの持ち主なんだよ

な。

はつきり言っちゃえば、なのはの力があれば新世紀エヴァンゲリオンのサードインパクトを一秒で出来るんだよな・・・

まあなのはに限って、そんな怖い事はしないんだけどね。

そうそう、俺達全員、アカデミーの生徒になった。

まあ忍者の勉強と言っても、俺達は忍術・幻術・体術を教わらなくても良いのだが、一応習っている。

座学も簡単だから、授業中はホントに暇なのだ。

でも、誰も授業中に寝たり抜け出したりはしてないぜ。

ナルト・シカマル・チョウジ・キバも、原作と違って真面目に授業を受けている。

その所為か、アカデミーの忍術・幻術・体術・座学のトップは、俺達が占領している。

一位はなのは、二位が俺、三位がタクミ、四位がサスケ、五位がシノ、六位がナルト、七位がヒナタ、八位がいの、九位がチョウジ、十位がキバとなっている。

しかも、俺達はアカデミーのカリキュラムを八割終えている。

なので、今では殆どアカデミーに行って居らず、修業の毎日なのだ。

えっ？

俺は一体どうなってどうしてるかって？

俺も毎日休まず修業して、斬魄刀は全て卅解出来る様にしたり、忍術の同時使用や合体忍術を出来る様にしたり、なのはが知らぬ間に付けた“BLEACHに出てくる技は全て使える”と言う能力も頑張ってマスターした。

そして・・・

火影「モトキよ、ワシに大切な話があるらしいの・・・」

モトキ「はい、大切な話があります。」

俺は・・・

火影「一体何じゃ、言ってみなさい。」

今・・・

モトキ「あの時に先延ばししていた欲しい物を、貰いに来ました。」

火影様と話し合いをしている・・・

第拾壹話の巻（後書き）

次回はモトキが欲しい物を言う話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

第拾弐話の巻（前書き）

今回は会話がメインですね……

しかし、地の文が矛盾だらけだ……orz

今回は広い心を持って読んでください

誤字・脱字があれば教えてください

第拾弐話の巻

sideモトキ

火影「フム、遂に欲しい物が出来たのじゃな?……タクミとなのははどうしたのじゃ?」

火影様が、俺を優しい目で見ながらタクミとなのはの事を聞いてきた。

モトキ「二人の欲しい物も俺が言いに来ました、だから二人は此処には居ません。」

タクミとなのはは、俺に全てを任せてくれたので此処には居ない。二人とも……本当にありがとうな。

俺が火影様にそう言うのと、火影様は納得してくれた顔をした。

火影「それでは、お主達は一体何が欲しいのじゃ?」

俺達が欲しい三つの物、まず最初は……

モトキ「まず一つ目、うちは一族の虐殺を考え直してほしい。」

火影「!?!」

俺が火影様にそう言うのと、火影様は目を見開いて驚いた顔をしながら俺を見てきた。

……まあ、この事を知っているのは木の葉の中でもトップシークレットの事だが、俺とタクミは原作を知っているし、なのはに關しては元神様だから全てを知っている。

火影「何故お主がその事を……否、お主達が知っていてもおかしくない。お主はこの世界の事を全て知っているんじゃない……。質問を変えよう、何故お主が“うちは一族の事を考え直してほしい”と言っくんじゃ？」

火影様は最初は自問自答をして、真剣な顔をして俺に聞いてきた。

モトキ「……うちは一族がクーデターを起こそうとしてるのは知っています。しかし、クーデターを起こそうとしてるのはうちは一族の中でも一部の人間だけ。他の人達は、そんな事を知らずに暮らしています。なのに、全てのうちは一族を殺すのはおかしいと思います。火影様、全てのうちは一族を殺すのではなく、クーデターを起こそうとしている一部のうちは一族だけを殺してください。これが俺達がやって欲しい事の一つです。」

俺は火影様に、頭を下げて頼み込んだ。

俺達にとって護るべき人は、俺達の大切な人達だけだ。

もし、俺の大切な人一人と俺と何の関わりの無い人百人、どっちを救う？って聞かれたら俺は迷う事無く大切な人一人を助ける。

今回のうちは一族虐殺事件、俺達の大切な親友のサスケが大きな傷を負わない為に言った事だ。

もしサスケが俺達の親友でなければ、俺達はそこ迄介入してないだろう。

俺達にどれだけ力が在ったとしても、人の感情や心を全部救う事は出来ない。

何故なら、俺達、この世に存在する皆は、それぞれ異なった人間だからだ。

火影「……確かに、お主の言う通りじゃ。クーデターを起こそうと

しているのは一部だけ、それ以外の皆は何も知らずに暮らしておる。そして、何の関係も無く殺される。……分かった、うちは一族の事に関してはいタチに伝えておく。」

火影様は、近くに置いてあつた何も書かれていない巻き物に何かを書き出した。

多分、今の事を忘れないようにメモしているのだろう。

そして火影様は、メモを書き終えると俺を見てきた。

火影「それで、他にお主達は何が欲しいのじゃ？」

俺達が欲しい三つの物、二つ目は……

モトキ「これは俺が欲しい物です。今から四年間、里の外に旅出る許可をください。」

俺がそう言うのと火影様は、先程以上に驚いた顔をして俺を見てきた。

火影「な！？い、一体何を言っておるんじゃ！？」

火影様は椅子から立ち上がって、大声を出して驚いた顔をしながら俺に言ってきた。

確かに下忍でも無い俺が里の外で四年間も旅をしたいって言うたら、誰でも火影様と同じ反応をするよな……

だが、俺が旅をしたいのには理由がちゃんとした理由がある。

この世界には、差別や虐待を受けている人が沢山居る。

先程、大切な人一人と何の関わりを持っていない人百人、どっちを助けるか言って、俺は大切な人一人と俺は言った。

だが、それは大切な人が居た場合だ。

救える人は出来るだけ救う。

矛盾や自己満足って言われてもしょうがない。

でも俺は助けたいから助ける。

……適当だな、俺って。

火影「……無理はしない、これだけは約束してくれ。」

火影様……

モトキ「……分かりました、火影様。」

俺がそう言くと、火影様は安心と不安の感情の顔をして椅子に座った。

火影「……それでは、最後に欲しい物は何じゃ？」

最後の欲しい物、それは……

モトキ「俺は旅をしている途中、様々な里に立ち寄ると思うんです。だから、里に入れて貰える許可証な物を作って欲しいです。」

これは、なのはが火影様に言っただけだ。

幾ら俺に力が在っても、幾らなのはに力が在っても、間に合わない事が在るかもしれない。

だから少しでも安全に旅が出来る様に、っとなのはが俺に言ってくれた。

……なのはは、本当に優しいんだよ。

火影「分かった、それに関してはワシも思っておった。」

火影様……

モトキ「……ありがとうございます。」

俺は頭を下げて、火影様にお礼を言った。

そして俺は、そのまま部屋から出て自分の家に帰って旅の支度を始めた。

俺の第二の両親にこの事を伝えたら、二人とも「可愛い子には旅をさせろ」って言葉があるから、無理をしないのと時々連絡してくれば別に良い」って言ってくれた。

……色々と突っ込む所が在ったが、突っ込んでいたら時間が掛かるので黙って二人の言葉に頷いた。

そして次の日、火影様に許可証を貰って、俺は木の葉を出た。

第拾弐話の巻（後書き）

次回はモトキが旅に出た後の木の葉の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

第拾参話の巻（前書き）

頑張つて執筆しましたゝ

期末テスト勉強……マジで大変だ……

今回はタクミ視点ですので……

誤字・脱字が在れば教えてください

第拾参話の巻

sideタクミ

久しぶりだな、この話の主人公の涼野 タクミだ！！

まあメタ発言はこれ位にして、モトキが木の葉を出て行って既に三日が過ぎた。

俺達はアカデミーのカリキュラムを八割終わらせているので、今日はモトキを除く全員がアカデミーに行かず近くの誰にも気付かれない森にやって来ている。

タクミ「それじゃあ、今日は新しい術を使える様にするぞ。」

俺がそう言うと、皆が頷いてそれぞれ異なった場所に歩いて行った。

モトキが木の葉を出て行った日から今日迄に在った事を、簡単に分かりやすく説明するぜ！！

まずなのはといのの元気が少し、否、かなり無くなった事だな。

二人はモトキの事が好きだから、モトキが居なくなると淋しくなつて、元気が無くなったんだ。

ホント、モトキは無自覚フラグメーカーだよな、“とある魔術の禁書目録”に出てくる上条 当麻みたいに……。

えっ？

俺はモトキに対して嫉妬はしないのかって？

フッフッフ、俺にはヒナタが居るから全く嫉妬する理由が無いのだ！！

……ワリイ、話が脱線したな。

まあ俺達が二人を元氣付けて、何とか何時もの……とはいかないが、まだマシな二人に戻した。

あの時はマジで大変だったんだからな……

後は……ああ、サスケの兄さんのイタチさんが、うちは一族の虐殺を少し変更した事を教えてくれた事だな。

ホント、モトキは取り引き上手だって改めて知ったよ、マジで……それ位かな、三日間で在った事と言えば……

ナルト「タクミ、俺に新しい術を教えてくれればよー!」

俺が皆（読者）に三日間に在った事を説明していると、ナルトが笑って俺にお願いしてきた。

……どうしよう、ナルトの奴、九尾と和解して何時でも九尾のチャクラを使える様になったから、ナルトの全力は半分の力を使わないと勝てないんだよな。

これ以上チートになったら、俺の出番が減る気がするんだよな。

……ワリイ、またメタ発言をしてしまった。

まあ俺にはONE PIECEの技を使える能力が在るから、別にナルトに術を教えても良いか……

タクミ「分かった……何を教えてやろうか……?」

教えるのは良いのだが、何の術を教えたら良いのか全然分かんねえ……

そう言えば、ナルトには未だ“あの術”を完全に教えてなかったな……

結局、モトキもナルトに一度見せただけだったし……

俺が教えてやるか……

タクミ「……決めた。ナルト、お前には“螺旋丸”を教えてやるよ。」

ナルト「ほ、ホントか!？」

俺がナルトにそう言つと、ナルトは目を輝かせて俺に確認を取ってきた。

……目が輝いてる奴、初めて見たよ。

タクミ「嗚呼、波風 ミナトさん・四代目火影様・お前の父さんが残した忍術の“螺旋丸”を教える。……厳しい修業をするが、やるか？」

ナルト「当たり前だつてばよ！！絶対に取得してやるつてばよ！！」

俺がナルトに聞くと、ナルトはガッツポーズをして俺にそう言ってきた。

タクミ「それじゃあ……やるか！！」

ナルト「嗚呼！！」

さて、ナルト改造計画を始めますか！！

……ナルトもナルト以外の皆も、かなり改造されてるけど……

第拾参話の巻（後書き）

次回からはモトキの旅の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

第拾四話の巻（前書き）

今回は独自解釈が含まれます

すいません、独自解釈をしてしまつてorz

少しの間はモトキの旅の話がメインです

……原作は何時になる事やら……

誤字・脱字が在れば教えてください

第拾四話の巻

sideモトキ

木の葉を出て何事も無く四日が経った・・・

俺が何故、旅に出たのかを簡単に説明するぜ。

俺が旅に出た理由、一つ目がこの世界に存在する忍術・幻術・体術を完全に把握する為だ。

俺はなのはに“NARUTOに出てくる全ての忍術・幻術・体術を使える”力を授けて貰った。

だが、俺は使えるだけでどんな印でどんな術なのか、知らない術ばかりだ。

なので、この旅をしてる間に全ての術を使える様にする。

だけど俺一人だけの力じゃ、全ての術を使える様になるには何十年も掛かる。

だから俺は、木の葉を出た瞬間に多重影分身の術をして、世界にバラけて貰った。

俺が旅に出たもう一つの理由、それはこの世界で苦しんでいる奴を救う為である。

この世界は、幸せになれない奴が沢山存在している。

だから、俺の力でそう行っただ奴等を救う為だ。

この二つが、俺が旅に出た理由だな。

俺が最初に救う人物、火の国の何処かの村に居る“アマル”と言う少女だ。

彼女は『劇場版NARUTO疾風伝 絆』に出てくる中心人物で、人工的に造られた零尾の人柱力だ。

アマルを人柱力にしたのは“神農”と言うジジイだ。

俺はソイツがアマルと接触する前に、アマルの村に行ってアマルに接触しないといけない。

でも、俺はアマルの村が何処に在るのか知らないんだよな。

此処の世界に転生してもう何年も経つから、原作知識を忘れ掛けるんだよな。

憶えてるのは、原作の大まかなストーリーと主要キャラの名前なんだよな……

こんな事なら、なのはに“地球の本棚”^{ほし}を使って貰って、この世界の事を確認しとけば良かった……

まあ後悔したって遅いし、後悔したって何も始まらない。

今は地道に術の修業をして、地道に情報収集をするしか方法が無いな。

モトキ「……そう言えば、ナルトに“螺旋丸”を教えてないな。……一度見せただけで、修業内容とか何も教えて無かったな……」

俺はナルトに“螺旋丸”を教えてない事を思い出し、木の葉が在る方角を見ながら後悔した。

今のナルトの実力なら、“螺旋丸”は必要な忍術の一つだ。

それに、“螺旋丸”はナルトの父親の波風 ミナトさんが創り出した忍術だし……

モトキ「……タクミが教えてるよな？」

俺は馬鹿な親友の顔を思い出し、馬鹿な親友に期待しながら視線を前に向けた。

するとそこには、刀などを持った山賊が俺に殺気を放っていた。さて、コイツ等はどうしようか？

問答無用、直ぐにこの世から消す

否、人の命を簡単に消してはいけない、直ぐに逃げる
此処は間を取って、相手の様子見だ

RPGの選択欄の様な物が頭に出てきたけど、この三つしか行動
出来ないよな。

さて、本当にどれを選ぶか？

俺が考えていると、山賊が俺に武器を構えて突っ込んできた。

問答無用、直ぐにこの世から消す

否、人の命を簡単に消してはいけない、直ぐに逃げる

此処は間を取って、相手の様子見だ

モトキ「月牙天衝！！」

俺は口寄せで“天鎖斬月”を召喚して、必殺技の“月牙天衝”を
山賊に向けて放った。

月牙天衝を喰らった山賊は、上半身と下半身が別れて絶命した。

……やっぱ、人を殺すのは好きになれないな。

でも、好きになれなくても慣れないと俺の心が負けちゃうな……
頑張らねえとな。

俺はそう思いながら天鎖斬月を消して、山賊の死体を飛び越えて
走り出した。

第拾四話の巻（後書き）

次回はモトキとアマルが接触する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

第拾伍話の巻（前書き）

時間が少し飛びます。

アマルの口調が違うと思います。

……マジですいません!! orz

誤字・脱字が在れば教えてください。

第拾伍話の巻

sideモトキ

山賊を殺して三ヶ月が経った・・・

俺は今、天鎖斬月を右手に持って全速力で森を走っている。

俺が走っている理由は簡単に言うと、ある奴等に追い掛けられているからだ。

俺を追い掛けられている奴等は……

「待てやアアア！！」

「糞ガキがアアア！！」

「仲間の仇イイイ！！」

「絶対にぶつ殺してやるウウウ！！」

俺が“月牙天衝”で殺した山賊の居残り組だった奴等だ。

居残り組の奴等は、剣・鈍器・斧etc・・・

様々な殺しの道具を持って、殺気を放ちながら俺を追い掛けている。

モトキ「チツ、いい加減ウザくなってきた！！」

俺はそう叫んで直ぐに立ち止まって、天鎖斬月を居残り組に構えた。

そして、天鎖斬月に力を込めて“月牙天衝”を居残り組に放とうとした時……

「グスッ……ウウウ……」

モトキ「!？」

すると突然、俺の後ろから誰かの泣き声が聞こえてきた。

俺は“月牙天衝”を放つのを止めて、後ろの茂みを見た。

するとそこには地面に怯えて泣いている、一人の少女が座り込んでいた。

こんな所で“月牙天衝”を放つたら、この子の心に傷を負わせてしまう！

モトキ「スマン!!」

「えっ？」

俺は女の子に最初に謝って、急いで女の子を背負って走り出した。

俺は女の子を背負って走りながら後ろを見ると、先程より狂喜に満ちた顔をした居残り組が俺達を見ながら追い掛けていた。

チッ、この子が居るから殺せねえ！

モトキ「だつたら!!」

俺は急ブレーキして立ち止まり、片手で天鎖斬月を居残り組に構えた。

そして俺は、力一杯天鎖斬月を振った。

すると天鎖斬月から“月牙天衝”より小さい黒い斬激が居残り組に放たれた。

ドツガアアアアアアアン！！！！！！

俺が放った斬激は、居残り組の直ぐ目の前の地面に当たり土煙が舞った。

俺はそれを見逃さずに、天鎖斬月を消して女の子をちゃんと背負ってその場から離れた。

.....

.....

.....

.....

モトキ「大丈夫か？」

「.....うん。」

俺達はその場を去り、小川が流れる少し拓けた場所にやって来た。俺は女の子を下ろして、向かい合わせになって座っている。

女の子は、無事に泣き止んだが顔は暗いままだった。

.....怖い思いをさせちゃったな。

モトキ「悪かったな、怖い思いをさせちゃって.....」

「.....大丈夫、大丈夫だから。」

俺は頭を下げて謝ると、女の子は俺の事を許してくれた。

……怖い思いをしてるのに、俺を許してくれるなんて何て心の優しい子なんだ……

モトキ「自己紹介が未だだったな。俺の名前は南雲　モトキ、木の葉隠れの人間だ。」

「……………モトキだね？助けてくれてありがとう。」

俺が自己紹介すると、女の子は俺にお礼を言ってきた。

……お礼を言われる事はしてねえ、迷惑を掛けただけなのに……

モトキ「……………別に良いさ。」

俺がそう言うと、女の子は俺に笑顔になって見てきた。

……この子は強い、肉体じゃなくて心がな……

「あたしの名前はアマル。よろしくね、モトキ！」

女の子、アマルは俺にそう言ってきた。

……………

モトキ「あ、アマル？」

アマル「そうだよ、モトキ！」

……よ、漸く出会えた！

俺は心の中でガッツポーズをして、此処の世界に転生して多分一番喜んだ。

第拾伍話の巻（後書き）

次回も少し時間が飛んで、病氣の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

第拾六話の巻（前書き）

久々に書いたので勘が取り戻せていません……

しかも今回は、かゝなりゝの独自解釈が在ります！

本当にすいません。

誤字・脱字が在れば教えて下さい。

第拾六話の巻

sideモトキ

アマルと出会って二ヶ月が経った・・・

俺はアマルに案内され、アマルの村に漸く辿り着く事が出来た。最初、村に入った時は敵視されていたが、アマルが皆を説得してくれたのでアマルの村に本当の意味で入る事が出来た。

そして初めて知ったのだが、アマルの両親は既に他界していた。俺はアマルの家に居候させて貰う代わりに、アマルの家の手伝いや村の手伝いをする事にした。

村の皆とも仲良くなれて、アマルとも親友関係になれたのだが……

アマル「はぁ……はぁ……」

アマルが遂に病気になってしまった。

今迄、病気に掛かっている様な素振りは全く見せなかったのに、俺は完全に油断していた。

俺はチャクラで体を覆っているのに病気に感染する事はないが、村の皆は感染する可能性があるので家から離れて貰っている。

アマル「はぁ……はぁ……も、もとき……？あ、あたし、はぁ……はぁ……たすかるの……？」

アマルが苦しそうな顔をしながら、目を細めて俺に聞いてきた。俺はそんなアマルの頭を撫でて、アマルに頬笑んだ。

モトキ「安心しろ、絶対に俺が救ってやるから！」

俺がアマルにそう言うと、アマルは俺の言葉に安心したのか目を

眠って眠った。

俺はアマルが寝たのを確認して、アマルの病気を治す準備を始めた。

俺は未だ医療忍術を完璧に使いこなせるレベルじゃないから、変に高等忍術を使えばアマルを苦しめるかもしれない。

かと言って、このままアマルを見て見ぬ振りをする事は出来ない。なので、俺はこの世界に存在しない技を使う。

モトキ「盾舜六花・双天帰盾、『俺は拒絶する』」

俺がそう言って手に力を込めると俺の手は青く光り出して、その光りはアマルの体を包み込んだ。

本来、この力は“現実を拒絶し、元の状態に戻す”能力を持っている。

だから、俺はこの力を使って“アマルが病気になった現実を拒絶し、病気になる前のアマルの体に戻す”と言う風に考えた。

だが、この考えは俺の予測に過ぎない。

しかもこの力にはちゃんとした物が必要だが、俺はその必要な物を持っていない。

なので、アマルが助かるかは五分五分なのだ。

だが、アマルは俺を信じて全てを託してくれた。

だから俺は、絶対に諦めないし、最後の最後迄諦めない！！

俺は三日間、休む事無くアマルを治療し続けた。

何度も諦めそうになったし、何度も睡魔に負けそうになったし、何度も倒れそうになった。

だけど俺は、何度も諦めず、何度も睡魔に勝ち、何度も踏張った。そして頑張り続けた結果、アマルの病気は完全に無くなった。

アマル「……う、うん……」

俺がアマルの病気が完全に無くなった事を確認した時、アマルが起き上がって目を擦りながら俺を見てきた。

……良かった、アマルは元気になったみたいだ……

俺はそう思った瞬間、意識を手放して倒れた。

……ハハッ、やっぱ……三日間眠らなかつたら……流石に疲れたな……

……

……

……

……

モトキ「……本当に付いて来るのか、アマル？」

アマル「当たり前じゃん！モトキが行くならあたしも行く！」

アマルの病気を治して一週間経った……

俺はあの後、三日間ずっと眠っていたらしい。

その間、病気が治ったアマルが俺の世話をしてくれたいらしい。そして俺は目を覚まして、『アマルの病気を治す』と言う目的を果たしたので、俺はこの四日間で村の皆に挨拶と旅の準備をした。そして旅に出ようとした今、アマルが旅の準備をして俺の旅に付いて来ると言ってきたのだ。

モトキ「旅をする事には何も異論は無い、アマルが自分で決めた事なんだからな。」

俺がアマルにそう言うと、アマルは嬉しそうな顔をした。

アマル「じゃ、じゃあ「だが何故、俺に付いて来るんだ？」そ、それは……」

俺はアマルの言葉を遮ってアマルに聞くと、アマルは俺から視線を外して顔を赤くして言葉を詰まらせた。

………何で視線を外され、顔を赤くされ、言葉を詰まらせているんだ？

アマル「あ、あたし……／＼／＼」

モトキ「……何だ？」

俺がアマルに聞き返すと、アマルは何かを決意した様な目で俺を見てきた。

アマル「モトキと一緒に居たいから！！／＼／＼」

モトキ「何だ、それで俺と一緒に旅をしたい訳なんだな？分かった、一緒に旅に出よう。」

顔を真っ赤にして大声を出すから何を言うのかと思えば、俺と一緒に居たいからか。

一緒に居たいなら幾らでも居てやるぞ、俺を必要としてくれるならな。

アマル「……モトキ、意味を分かって言ってくれてるの?」

するとアマルは、今度は不安そうな顔をしながら聞いてきた。

モトキ「意味って……只単に俺と一緒に旅がしたいだけだろ?他に理由が在るのか?」

俺がアマルにそう言うと、アマルは深い溜め息を吐いた。

アマル、溜め息を吐くと幸せが逃げるってタクミが言ってたぞ。

モトキ「それじゃあ行くぞ、アマル。」

アマル「ま、待ってよ!」

そして俺達は、次の目的地に向かって村を出た。

次は何処に行こうか?

第拾六話の巻（後書き）

次回はモトキとアマルの旅の一日の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第拾七話の巻（前書き）

バイトを辞めたい、年末で辞めれるけど今直ぐ辞めたい……

今回の話は次の話の繋ぎなので……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第拾七話の巻

sideモトキ

俺とアマルが村を出て大きな事件も無く一週間が経った。

俺とアマルは今、比較的安全そうな誰も居ない草原で絶賛修行中だ。

俺は卍解・大紅蓮氷輪丸と卍解・千本桜景厳と言う二本の斬魄刀の卍解を同時に使える修行、アマルは基礎中の基礎の忍術・幻術・体術の修行だ。

俺とアマルは、二人の距離を大分取って修行している。

何故なら、俺は未だこの力を完全に制御出来ていないから、間違えてアマルを危険な目に合わせてしまう可能性が在るかもしれないからだ。

アマルには俺の影分身が付いているが、“念には念を”と言う諺が在るからな。

さて、一通り説明が終わったし、修行に集中するとしますか。

「氷天百花葬ッ！」

俺はそう叫んで大紅蓮氷輪丸を上に向けると、突然快晴だった空が曇りだして俺の前に在る木の上の雲の部分が無くなり其処から雪が降ってきた。

そして木が其の雪に振れると徐々に凍っていき、雪が降り止んだ時には木は氷に完全に包まれ、其の氷の形はまるで氷の花のようになっていた。

クツ、ドチラかの必殺技を使うと、もう片方の卍解が安定しなくなる……！

俺が大紅蓮氷輪丸の必殺技の“氷天百花葬”を使ったら、千本桜景厳が消えそうになったり暴走しそうになったので、俺はチャクラ

を千本桜景敵が安定する様に流し込んだ。

「お、大人しく……しろオ！」

ドツシユウウウウン！！！！！！

俺がそう叫んでチャクラを更に流し込むと、大紅蓮氷輪丸と千本桜景敵は始解する前の普通の日本刀に戻った。

俺は其れを確認すると二本の刀を地面に刺して、地面に座り込んで何度も深呼吸をして疲れを取った。

「……まさか此処迄卍解の同時使用が難しいなんて……」

俺はそう言つて、地面に突き刺さった氷輪丸と千本桜を引っこ抜いて、二本を消して天鎖斬月を口寄せした。

そして俺は天鎖斬月を両手で持って、天鎖斬月に力を入れて氷天百花葬に構えた。

「月牙天衝ッ！！」

俺は天鎖斬月の必殺技の“月牙天衝”を氷天百花葬に放った。

バッキイイイイイン！！！！！！

月牙天衝を喰らった氷天百花葬は、大きな音を出して崩れていった。

……月牙天衝一撃で崩れるとは、未だ未だ強度が足りないな。
しかし、氷天百花葬を使ったからこの辺りに居た山賊達が此処に
来ているかもしれないな……

「アマルの所に行くか。」

俺は天鎖斬月を消して、アマルが居る場所の方を見てそう言った。
そして俺は瞬歩でアマルが居る場所に移動した。

「も、モトキ!?!」

俺が瞬歩でアマルが居る場所に移動すると、アマルが“分身の術”
をしていて声を揃えて俺の名前を言ってきた。

……もう“分身の術”を使える様になったのか……

俺はアマルの成長ぶりに驚きながらも、影分身の俺を消して荷物を
纏めた。

「アマル、急いで荷物を纏めてくれ。直ぐに場所を移動するぞ。」

「????分かった。」

俺が荷物を纏めながらアマルに言うと、アマルは頭に?マークを
浮かべながら了承してくれた。

そして荷物を纏め終わったので、俺達は急いでその場を立ち去っ
た。

「モトキ、次は何処に行くの?」

するとアマルは、俺の隣で走りながら俺に聞いてきた。
そうだな……此処から近い里と言えば……

「……砂隠れの里に行ってみるか？」

砂漠の我愛羅、一尾の人柱力で孤独に生きている奴……俺は我愛羅を救ってみせる。

例え、未来が大きく変わったとしても救ってみせる。

俺はそう思いながら、アマルと一緒に砂隠れの里に向かった。

第拾七話の巻（後書き）

次回はモトキとアマルが砂隠れの里に入る話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第拾八話の巻（前書き）

やっぱオリジナルの話を考えるのは難しいな。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第拾八話の巻

sideモトキ

俺とアマルは今、体を密着させて岩の穴の中に入っている。

何故なら、俺とアマルは砂隠れに向かって砂漠を歩いていたら突然砂嵐が襲ってきたので、近くに在ったこの岩の穴の中で砂嵐が治まるを待っているんだ。

俺の最初の説明で変な事を考えた奴、少しO・HA・NA・SHI
Iしようか？

まあO・HA・NA・SHIはまた今度にして、これから一体どうしようか？

この砂嵐を見る限り、少なくとも半日は絶対に治まらない。

俺は大丈夫なのだが、アマルが肉体的にも精神的もこの状況は辛いだろう。

食料は今日の昼飯分しか無いし……完全に困ったな、コリヤ。

「も、モトキ、だ、大丈夫か？／＼／＼」

するとアマルが突然、顔を赤くして俺に話し掛けてきた。

俺はお前が大丈夫かを心配するぞ、其の顔を見たら……

「嗚呼、俺は全然平気だ。……アマルは大丈夫か？顔が赤いが……」

「だ、大丈夫だから心配するな！／＼／＼」

俺はアマルの質問に素直に答えてアマルを心配すると、アマルは顔を俺から背けてそう言ってきた。

……時々思うんだが、アマルって俺の事が嫌いなのか？

顔を背けて俺に言ってくるし、俺が質問しても顔を下に向けて黙

り込むし、他にも俺を嫌ってる様な行動をされるし……

何でアマルは嫌いな俺と一緒に旅をする気になったんだ？

先ず先に、アマルが俺を嫌う様な事をしたのか？

全く見に覚えが無いぞ、神にだって仏に誓ってやる。

俺はアマルが嫌がる事は絶対にしていない！

「どうしたんだモトキ、急に黙り込んで……？」

俺が頭の中で集中して考えていたので、アマルが心配そうな顔をしながら俺に聞いてきた。

……ダメだ、また自分一人の世界に入ってアマルの事を忘れてた。こんな事ばかりしてるからアマルに嫌われるんだな、注意しないとな……

「何でも無いから気にするな。」

俺はアマルにそう言って、穴から見える外の景色を見た。

アマルにはああ言ったが、真剣にこれからの事を考えないといけないな。

砂嵐が治まる迄、この狭い穴の中で座りっぱなしってのは不可能だ。

かと言ってこの砂嵐の中を歩いて砂隠れの里に向かうのも不可能。……少し、否、かなりリスクが在るがこれしか無いな。

「アマル。」

「どうしたんだ、モトキ？」

「少し話が在るんだ、聞いてくれ。」

.....

.....

.....

.....

「大丈夫か、アマル!?」

「う、うん!」

俺は背中に乗っているアマルに大丈夫か聞くと、アマルは俺に大きな声を出して答えてくれた。

俺は今、アマルを背負って砂嵐の中を瞬歩を使って全速力で移動中だ。

あのまま穴の中で砂嵐が治まるのを待つのは不可能と考えた俺は、一気に砂嵐の中を抜けて砂隠れの里に向かおうと考えた。

馬鹿しか思い浮かばない作戦でリスクが高いのにも関わらず、アマルは俺を信じて賛成してくれた。

俺は持つてきていたゴーグル（スキーなどで使う様なゴーグルの形）を付けて、自分の荷物を前で背負ってアマルを背中に乗せて瞬歩で砂嵐を抜けようとしてる訳だ。

アマルは俺から離れない様に腕に力を入れているが、砂嵐で目を開けないでいる。

人間は視覚から八割の情報を手に入れている。

だが視覚を封じられると、人間はその他の感覚でしか情報を手に入れない。

しかも、手に入れられる情報は僅か二割。

だがアマルは、俺を信じてくれているから目を瞑っている。

俺は其の信頼にちゃんと応えなければならない。

「未だか、未だ砂隠れの里には着かないのか!？」

ゴーグルをして白眼を使っているが、今だに砂隠れの里が見えない。

瞬歩を休まずに連続で使用+白眼を極限迄使用している所為で、俺に残されたチャクラは後僅かしが無い。

クソツ、砂隠れの里、一体何処に在るんだ!？」

俺はそう思いながら不意に横を見ると、少し離れた場所に不自然な山が見えた。

ある一定の高さで窪みが出来ていて、其の窪みに人が沢山立っていた。

……見つけた、砂隠れの里!

俺は最後の力を振り絞って砂隠れに向かって瞬歩を使った。

……ヤベエ、足の感覚が全く無いし、視界がスゲー霞むし、音が全く聞こえないし……

俺は感覚が無くなっていくのを感じながら、急いで砂隠れの里の入り口の前にやってきた。

「止まれ!」

すると三人の砂隠れの忍びが俺達の前に現れて、警戒しながら俺にそう言うてきた。

「……アマルを……頼む……。」

俺は三人にそう言って、ゆっくり地面に倒れた。

……ヤベエ、頑張り過ぎて眠たくなってきた……

俺は突然襲ってきた眠気に負けて、目を閉じて意識を手放した。

第拾八話の巻（後書き）

次回は我愛羅と接触する話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第拾急話の巻（前書き）

昨日は更新が出来なくてすいません。

そして今回の話はご都合主義です。

本当にすいません！

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい。

第拾急話の巻

S i d e モ ト キ

・

・

・

・

「……うう、知らない天井だ。」

俺は重たい目蓋を頑張って開けて、視界に映った知らない天井を見て新世紀エヴァンゲリオンの碇 シンジの迷言を言った。

まあ阿呆な事はこれ位にしないと、俺は体を起こして俺が居る部屋を見渡した。

この部屋は砂の様な物で出来ていて、見た事の無い風景が窓の外で広がっていた。

……ってか、此処は一体何処なんだ？

ガチャッ！

俺が此処は何処かを考え込んでいると、この部屋の扉が誰かに開かれた。

「あつ、モトキ！気が付いた！？」

すると扉の外からアマルが入ってきて、俺に近付いて俺の手を握り締めて聞いてきた。

「俺は大丈夫だ。所でアマル、此処は一体何処なんだ？」

俺がアマルに聞くと、アマルが驚いた顔をして俺を見て後ろを見た。

俺もアマルに釣られて後ろを見ると、一人の女顔の男性が立っていて俺を見ていた。

……誰、この人？

「僕の名前は夜叉丸、風影様の命で疲労で倒れた君と君が連れてきたアマルちゃんの世話をしてたんだ。そして此処は砂隠れの里の中に在る僕の家だよ。」

すると女顔の男性・夜叉丸さんが頬笑みながら俺が疑問に思っている事を全部教えてくれた。

……そう言えば俺、砂嵐を無理矢理突破して砂隠れの里の入り口に到着したと同時に倒れたんだっとな。

……未だ未だ修行が足りないな。

「夜叉丸さん、何処の輩か分からない俺の世話をしてくれてありがとうございます。」

俺は頭を下げて夜叉丸さんにお礼を言うと、夜叉丸さんは「僕は風影様の命を遂行しただけですよ。」と言って苦笑いしていた。

全く、こんな良い人が居るなんて砂隠れも捨てた物じゃないな。

……ってあれ？

確か夜叉丸さんって我愛羅の世話係をしてた人だよな？

俺が今この世界では六歳でナルト達と同じ年だから我愛羅とも同い年。

我愛羅は夜叉丸さんを六歳の時に四代目風影の命とも知らずに殺してしまっただよな？

でも夜叉丸さんは普通に生きていて、俺の目の前に立っている。

……って事は、未だ我愛羅を暗殺する命が来てないって事か！

「……どうしたんだモトキ、急に黙り込んで？」

するとアマルが心配そうな顔をしながら、俺の手を強く握って俺に聞いてきた。

夜叉丸さんも、アマルと同じで心配そうな顔をしながら俺の顔を見ていた。

ただ、また一人で考え込んでしまった。

はぁ、直そうと思っているのに全然直らないよな……

って、また黙り込んで考えてるよ……

「何でも無いよアマル、只少し考え事をしてただけだからよ。」

俺はそう言っただけでアマルの頭を優しく撫でると、アマルは顔を俯かせて俺から視線を反らした。

やっぱり嫌われてるのか、俺って？

「こりゃ将来が大変だ。」

「えっ、何がです？」

「うっん、君の将来が何となく予想出来ただけだから。」

夜叉丸さんは俺の顔を苦笑いしながら見てそう言ってきたので、俺は夜叉丸さんに聞いたが夜叉丸さんは俺にそう言っただけで何も教えてくれなかった。

……何で俺の将来が予想出来たんだ？

なのはみたいに予知能力や未来が見える力は持っていないのに、何で初対面の俺の将来が予想出来たんだろうか？

そう言えばタクミに昔、「お前は将来絶対に後悔する奴だ。」って言われた事が在ったな。

……この世界（タクミは違うが）は将来を予想出来る人が多いのか？

コンコン

俺はアマルの頭を撫でながら考えていると、突然この家の扉を叩く音が聞こえてきた。

夜叉丸さんは扉を叩いた人物を予想しているのか、嬉しそうな顔をしながら玄関に向かった。

暫く待っていると、夜叉丸さんと一人の少年が部屋に入ってきた。

「モトキ君、アマルちゃん、こちらは四代目風影様の息子の我愛羅様です。」

すると夜叉丸さんは自分の隣に居る少年・我愛羅の事を紹介してくれた。

「我愛羅か、良い名前だな。俺は木の葉隠れに住んでいる南雲 モトキだ。今は訳あって旅をしている。よろしくな、我愛羅。」

「あたしはアマル。木の葉隠れの里から少し離れた村に住んでる。今はモトキと旅をしてるんだ。よろしくな!」

「ぼ、僕だが、我愛羅、よ、よろしく。」

俺とアマルは我愛羅に自己紹介をして、我愛羅もオドオドしながら俺達に自己紹介をしてくれたので、俺達は「よろしく!」と声を揃えて言った。

さあて、俺が助きたい二人目の人物・砂漠の我愛羅に会えたんだ。しっかりと原作ブレイクをしないとな。

第拾急話の巻（後書き）

次回はモトキが風影に激怒する話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第貳拾話の巻（前書き）

うわゝ、メツチャご都合主義だよ……

もつと原作を勉強した方が良いな、絶対に其の方が良いな。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第貳拾話の巻

sideモトキ

砂隠れの里にやって来て半年の歳月が経った。

あれから俺達是我愛羅と打ち解け合い、今じゃ毎日一緒に遊ぶ位の親友になった。

まあ最初は我愛羅の心が不安定で我愛羅が操る砂で何度か怪我をしたが、我愛羅も悪気が在った訳じゃないし怪我をするって事は我愛羅が俺達を完全に信じれていない事なので俺達是我愛羅の側にずっと居た。

ずっと一緒に居た所為か我愛羅の心は日に日に安定して行き、今では砂を自分の意思で操る事が出来て無闇に人を傷付けなくなった。其のお陰で今迄離れて遊んでいた同年代の奴等も、少しずつ我愛羅の友になって今では我愛羅の周りには一緒に笑い合える仲間が沢山居る。

やっぱり原作ブレイクをして良かったぜ、だって我愛羅がずっと笑顔で毎日を過ごしてるんだからな。

俺とアマルもこの半年でかなりレベルアップをしたんだ。

俺は全ての斬魄刀の卍解を使える様になり、二分間だけだが二つの斬魄刀の卍解をコントロール出来る様になった。

他にも世界にバラけた俺の影分身達のお陰で、俺の知っている術の印や俺の知らない術の印・武器や知識などを得る事が出来た。

アマルは基礎中の基礎である忍術・幻術・体術を完璧にし、今は医療忍術をマスターしようと頑張っている。

何故医療忍術をマスターしようとしてるのかと聞いたが、アマルは顔を赤くしながら俯いて「言えない。」って言ってきた。

まあ言えないのなら無理に聞く訳にもいかないし、アマルがマスターしたいって言うなら俺は応援する。

まあこれ位かな、この半年の説明は。

そして俺は今、

「南雲、これ以上我愛羅に近付くな。」

風影と向かい合わせになって話をしている。

……………は？

「意味が分かりません、何故我愛羅に近付いちゃいけないんですか？」

「お前は既に気付いてるんだろ、我愛羅の中に尾獣の一体・砂の守鶴と呼ばれている一尾が封印されている人柱力だと言う事を。」

俺が風影に聞くと、風影は殺気を放ちながら俺にそう言ってきた。我愛羅の砂は我愛羅自信の体の中に封印されている一尾の力が影響していて、其の所為で風影や里の上層部が我愛羅を危険視して幾度なく我愛羅を殺そうとした。

俺達と遊んでいる時も暗部が殺そうとしてきた事が在ったが、俺が返り討ちにして殺しちまったんだがな……

「アイツは危険だ。一尾を満足にコントロール出来なければ良いが、コントロール出来ないのであれば里に危険が及ぶ。消す事が里にとって、我愛羅にとって最前の決断だ。」

ブチッ！！

風影がそう言った瞬間、俺の中に在る何かがぶち切れた。

「ふざけんじゃねエ！！」

ザッ！！

ボンッ！！

ヒュッ！！

俺が風影に大声で言った瞬間、俺の周りに風影の側近が現れたが俺は側近が現れる前に“影分身の術”を発動して斬魄刀を一瞬にして口寄せして、此処に居る全員の心臓に刀の刃を当てた。

此処に居る全員は俺の一瞬の動きを見て驚いた顔をした。

「我愛羅が一体何をしたんだ！？今の我愛羅の心は安定して、この数ヶ月は誰一人殺してないんだぞ！！其れに、一尾を我愛羅の中に封印したのはアンタ等の勝手だろうが！！なのに、自分達の命に危険になったから殺す？……アンタ等は人の命を何だと思ってんだ！！」

俺は此処に居る全員に殺気をフルに放ちながらそう言うと、此処に居る全員が少し青ざめて動けなくなった。

確かに里を納める人になれば平和を第一に考えないといけない、だが平和に犠牲が在っては本当の平和とは言わない。

本当の平和と言うのは、何の犠牲も出さずに全員が笑顔で居られる場所にして初めて平和と言えるんだ。

「もし、アンタ等が我愛羅に対する接し方を考え直さないのなら、俺は我愛羅を砂隠れの里を力付くで連れ出す。例え砂隠れの里と全面戦争になったとしても、俺は我愛羅の味方をする。」

俺はそう言つて影分身を消して殺気を抑え、この場から出る扉に歩き出した。

……………チツ、

「三日だ、三日間だけ考える時間をやる。もし、三日間の間に答えを出せなかったら我愛羅を連れ出す。」

「ふ、ふざけるな！！貴様の様な餓鬼に何故我々が言つ事を聞かなきゃならんのだ！！」

俺は我愛羅の顔を思い出して立ち止まって全員にそう言ったが、暗部の一人が俺の言葉を聞いて声を荒げて俺にそう言ってきた。

チツ、折角人がチャンスを与えてやったのに……

俺は“月牙天衝”を放つ為に天鎖斬月を口寄せしようとした時、風影が俺と暗部の間に割って入ってきた。

「……………愛する人の為に死ぬ。」

すると突然、風影が悲しそうな顔をして小さい声で呟いた。

俺は風影の顔を見て、頭が一気に冷めて冷静になった。

「南雲、お前は愛する人の為に死ぬるのか？」

風影は真剣な顔をして俺の顔を見て俺に聞いてきた。
愛する人の為に死ぬる……………か。

「当たり前だ。俺は99人を救って1人を見捨てるアンタ等の正義じゃなく、大切な1人を救って関係の無い99人を見捨てる最低な正義だ。其の最低な正義の為に、大切な人を守る為に死ぬなら、俺は絶対に後悔しない。」

「……………そうか。」

俺は自分の正義を言って決意を風影に伝えたと、風影は何かを決心した顔をして俺の顔を見てきた。

「我愛羅を里の大切な人とし、始末する事を中止する！」

風影がそう言った瞬間、周りの暗部が騒ぎ出したが風影が暗部を睨んで黙らせた。

「風影と言う立場になり様々なプレッシャーを受け、大切な事を見失っていた。……………礼を言う、南雲 モトキ。」

「……………俺は何もしてねエ、決めたのは風影、アンタ自身だ。俺は旅を再会するから直ぐに出てく、後はアンタ等で解決しな。」

俺はそう言ってこの場から去った。

……………

……………

……………

……………

「ホントにもう行っちゃうの？」

「ワリイな我愛羅、俺達は旅を未だ終えた訳じゃ無いんだ。だから、此処にずっと居座る訳にはいけないんだ。」

「で、でも……」

俺・アマル・我愛羅は砂隠れの出入り口にやって来た。

あの後、アマルに事情を説明し荷物を纏めて出入り口にやって来た時、我愛羅が俺達の後を追って来たんだ。

そして里を出る理由を我愛羅に伝えると、我愛羅は泣きそうな顔をして顔を俯かせた。

うーん、こう言った時は……

「これが最後って訳じゃないんだ。」

「えっ？」

「俺達が頑張って生きてりゃ何時か必ず会える、其の時は木の葉の忍者と砂の忍者だ。」

俺はそう言っで我愛羅に手を差し出すと、我愛羅は笑顔で俺の手を握って握手をした。

そして俺は不意に我愛羅の後ろを見ると、風影と夜叉丸さんが感謝した顔をして立っていた。

「これからは友と、兄貴や姉貴と、夜叉丸さんと、父親と一緒に頑張るんだぞ。約束だ。」

「うん！」

俺と我愛羅は堅い約束を交わして、俺とアマルは砂隠れの里を出た。

「じゃあなー！」

「また会おうね、我愛羅ー！」

「二人とも、元気でねー！」

俺達はずっと我愛羅に手を振りながら歩き、我愛羅もずっと俺達に手を振ってくれた。

第貳拾話の巻（後書き）

次回は氷遁使いの人物、この小説のTSキャラが出る（話を予定しています）

次回もお楽しみに！

第貳拾壹話の巻（前書き）

今回はかなりの独自解釈＋ご都合主義があります。

其れを踏まえて読んで下さい。

第貳拾壹話の巻

sideモトキ

砂隠れの里を出て何事も無く一ヶ月が経った・・・

俺とアマルは、水の国・霧隠れの里に滞在している。

水の国・霧隠れに来たのはちょうど三週間前で、やって来た理由は此処にも俺が救いたい奴が居るからだ。

だけど俺が救いたい奴を一瞬間搜したのだが会えなかった。

なので俺は取り敢えず“影分身の術”を発動して、影分身達にソイツを探して貰っている。

えっ？

俺は一体何をしてるかって？

俺とアマルは人気の無い大きな湖にやって来て、現在進行で修行をしている。

白眼して救いたい奴を搜していたら、偶々此処を見つけたから修行している訳だ。

人氣が無い！俺の力をフルに使えるので、影分身に救いたい奴を捜させてから二週間ずっと修行している訳だ。

だけど、未だに救いたい奴が見つかったと影分身から伝わっていない。

……もうこの里を抜けたのか？

俺はそう思いながら印を結ぼうとした時、突然湖の真ん中から超巨大な亀？が現れた。

しかも、何故か尾が三本も在った。

……あれって三尾ですか？

ちよつと待てエエエエ！！！！

俺は別に三尾に会いに来たんじゃない！！

三尾は原作通りに進めてナルト達と対処しようと思ってたんだぞ
！！

「も、モトキ、あれ何？」

アマルが三尾に怯えて俺の後ろに隠れて、涙目になりながら俺に聞いてきた。

三尾が此処に居るって事は四代目水影・やぐらは死んでいるって事か？

……ダメだ、細かい原作は忘れたから其処の所は覚えてない。

しかし、逃げようにも向こうは戦う気満々で逃がしてくれそうにねエしな……

最悪、あの技を使ってアマルだけでも逃がせば良いか。

「あれは三尾、この世に九体しか存在しない尾獣の一体だ。アマル、実践がアイツで悪いが、俺と一緒に戦ってくれないか？お前は絶対に守るから。」

「……………分かった。モトキがあたしを守ってくれるなら、あたしはモトキを守る！」

俺がアマルに聞くと、アマルは真剣な顔をして俺にそう言ってくれた。

サンキューな、アマル……

俺は天鎖斬月・氷輪丸・千本桜を口寄せして、千本桜をアマルに渡した。

そして俺は氷輪丸を卅解して大紅蓮氷輪丸にして、天鎖斬月と共に構えて三尾に突っ込んだ。

……………

.....

.....

.....

「ゲホッゲホッ……ハア……ハア……四象封印……」

俺は血を口から吐きながら素早く印を結んで、俺自身の中に“四象封印”の重ね掛けで封印した。

四日四晩の死闘の末、俺とアマルはギリギリ三尾に勝利した。天鎖斬月や大紅蓮氷輪丸の技は三尾には殆どダメージが無く、戦いの途中で刀が折れてしまった。

幾らまた口寄せをすれば元に戻るとは言え、死神の、しかも卍解した刀を二本折るとは流石は三尾だ。

そして其の後も口寄せして少しずつでは在るが三尾にダメージを与えていった。

アマルは戦いの中で何かに目覚めたのか、千本桜を卍解して千本桜景蔵で戦った。

だが卍解は体に大きな負担が掛かる為、三日目でアマルは体力が尽きて倒れてしまった。

アマルが倒れたのと同時に全ての斬魄刀が折れてしまったので、俺は使える忍術と体術・そして残された戦力になるBLEACHの技で三尾と戦った。

そして今、体中をボロボロにして骨も何本も折って漸く三尾が気絶したので俺の体の中に封印した訳だ。

「……ハア……ハア……ちょ、ちょっと、ヤバいかも……」

俺はそう言つて地面に倒れ込むと、視界が霞んで行つて眠気が俺を襲つてきた。

……ヤバイ、アマルには怪我は無いがこのままじゃ間違いなく誰かに誘拐されたり殺されたりする。

それだけ此処は危険だ、だけど体は全く言う事を聞いてくれない。チクショウ……此処でゲームオーバーかよ……

「おい大丈夫か、本体（俺）！！」

すると俺（影分身）が突然現れて、異常な位の驚いた顔をしながら俺に聞いてきた。

ハハッ、喋る力も無いから何も言えねエや……

「俺は本体（俺）とは違って完璧に使える訳じゃないが、今は躊躇してる場合じゃねエな！！」

影分身は俺にそう言つて俺を抱えて近くの木に凭れさせて、手に力を込め始めた。

……この光……まさか……

「盾舜六花・双天帰盾、俺は拒絶する」

すると俺（影分身）はこの世界で一番と言つても言い医療の技・BLEACHの井上織姫が使う“盾舜六花・双天帰盾”を使って、ポロポロになった俺の体を治療し始めた。

俺（影分身）は俺（本体）とは違って、BLEACHの技を使う事は殆ど出来ない。

だが俺（影分身）は自身のチャクラを全て使つて、BLEACHに出てくる“盾舜六花・双天帰盾”を発動している。

俺（影分身）の顔色は徐々に悪くなつていき、“盾舜六花・双天

帰盾”を止めた。

俺の体は完全には言わないが動ける位に迄回復し、其れを確認した俺（影分身）は苦しそうにしながらも頬笑んできた。

「残されたチャクラで俺（本体）に伝える。アイツを漸く見つけた。アイツは母親と一緒に此処から北に3kmの場所に隠れている。だが、其の近くに暗部が居る。……ちゃんと伝えたぜ。」

ボンッ！！

俺（影分身）はそう言つて、残りのチャクラを使って消えた。

俺（影分身）は消えた瞬間、俺の中に俺（影分身）の記憶と経験値が入ってくるのを感じた。

俺は俺（影分身）の記憶を整理して、立ち上がって散らばった斬魄刀を全部消して、アマルを背中に背負って俺（影分身）の記憶を頼りにソイツの所に向かった。

………

………

………

………

俺は記憶を頼りに其の場所に向かうと、何人もの暗部に囲まれた母子が居た。

………体が保つか分かんが、あの二人を見捨てる事なんて出来る

かよ!!

「ちょっと待てや、ゴラァ!!」

俺はそう叫んで二人の前に瞬歩で移動すると、此処に居る全員が驚いた顔をして俺を見てきた。

さて、厨二病末期の患者の様に出てきたのは良いが、此処からどうしたのか……

まっ、其れは戦っていれば何とかなるか。

「この子を頼む。」

俺は母子にアマルを預けて、クナイを構えて暗部に突っ込んだ。

第貳拾壹話の巻（後書き）

次回は水の国での日常の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第貳拾貳話の巻（前書き）

あ、アブねエ。

マジでギリギリ間に合ったよ……

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

第貳拾貳話の巻

sideモトキ

「白！モトキはアタシと今から修行するんだから、家で温和しくしてろよ！」

「いいえ、モトキ君は僕と一緒に出掛けるんです。アマルさんこそ、一人で修行に行つて来てはどうです？」

「まあまあ、意味も無く喧嘩するん」「モトキ（君）は黙つてて（下さい）！」「……はい。」

今の状況を分らない人の為に……つて言つても全員分からない人だよな。

と言う事で、前回から今のこの状況迄を成る可く簡単に説明するから、其処の所宜しくな。

三尾を封印した俺は、影分身から受け取った記憶を頼りに俺が捜していた人物の所に行き、捜していた人物を殺そうとしていた暗部と戦おうとした。

これが前回の終わりだよな、だから此処からが今の状況に繋がる迄の説明だ。

暗部は意外にも強くても、チャクラ不足で斬魄刀を使えないのでかなり苦戦した。

とは言え、ずっと修行していたので体術と“滅却師”^{クインシー}の力で勝てた。

そして俺が救った母子は俺が捜していた人物・白と白の母親・氷麗さんだ。

この世界の白の性別は男ではなくTSして性別が女、歳も俺やア

マルと同年だった。

最初は吃驚したけど、まあイレギュラーが在るのは不自然じゃないから気にしてないけどな。

それと、白の母さんは名前がちゃんと表明されてなかったから、全く知らなかったが良い名前だから直ぐに覚えたぜ。

原作なら氷麗さんは白の父親に殺され白が父親を殺すのだが、この世界では父親に殺され殺す前に逃げてきたらしい。

原作的にはダメなんだろうと思うが、俺的には最高の展開なので本当に嬉しかった。

まっ、其処から色々在って今は俺が頑張って作った隠れ家に住んでいる訳だ。

そして今日、約束した筈の無い約束でアマルと白が俺の腕を引っ張り合って口論中なのだ。

これが今迄の状況だ、頑張って説明した結果だから分からなくても我慢して欲しい。

って、俺は怪我人だから優しくソフトに扱って!!

三尾との戦い+暗部との戦いで負った怪我と体積した疲労が未だ回復してないんだって!!

じゃないと俺、冗談抜きで死んじゃうからさ!!

「二人とも、良い加減にしないとモトキ君が死ぬわよ?」

「「えっ…………」」

氷麗さんがそう言うてくれたので、二人は引っ張るのを止めて俺の顔を見てきた。

ヤッベエ、マジで両腕が痛いんですけど……

「…………ヤバい、本当に色々な部分が痛いんだけど…………」

俺は両腕を抑えながら床に座ると、白が心配そうな顔をしながら俺の腕を撫でてくれた。

「今日は家でゆっくり休んで下さい、僕がずっと看病してあげますから。……勿論、夜の相手もしますから。／＼／＼」

「……………は？」

白が最初は頬笑みながら言って、最後は頬を赤くして恥ずかしそうな顔をしながらそう言ってきた。

否、看病してくれるのはありがたいよ、ありがたいけど夜の相手って何だよ？

……まさかと思うけど、R-18に指定されている性行為の事を言っているのか？

……無い無い、白みたいな可愛い奴が俺みたいな男を好きになる訳が無い。

例えば好きだったとしても、性行為をこの歳で本気でしたいって言うてる訳無いしな。

全く、冗談がキツイ、キツ過ぎるがな……

「冗談でもそんな事を言うなよ、本気にしちゃうからな。俺は眠たいから寝る、二人とも仲良くしろよ。」

俺は白とアマルにそう言って寝室に行き、扉を閉めて布団を敷いて転がった。

あゝ、眠たくないのに寝ると寿命が縮むって聞いたけど、疲れる時は寝るのが一番だよな。

睡眠は良いね、睡眠は疲労を取ってくれる。リリンが生み出した文化の極みだよ。by南雲モトキ

渚カヲルの名言をパクって少し変えたけど、完成度が普通に高いな。

まあ元が良いから、少し変えても完成度が良くなるだけかもしれないけどな。

しかし、何故リビングから白とアマルの恥ずかしそうな声が聞こえるんだ？

……同性に恋したのか？

喧嘩する程仲が良いって言うし、嫌いの反対は好きって言うし、まさか……

まあ、人の好みは森羅万象だし、同性愛者だとしても拒絶や差別はしないさ。

だって大切な仲間だからな。

そんな事を思いながら俺は目を閉じて意識を失った。

第貳拾貳話の巻（後書き）

次回は原作には殆ど出てこなかったキャラ達を出す話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！！

第貳拾参話の巻（前書き）

メリークリスマス！

……眠たい、頑張つて夜中に書いたからキャラが可笑しくなってる。

言い訳？

先に言つておいた方が良いでしょう？

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第貳拾參話の巻

sideモトキ

アマルと白が実は同性愛者？疑惑事件が起こってから何事も無く三日が経った。

俺は今、一人で人気の無い森をひたすら歩いている。

何故森を歩いているのかと言うと、俺自身も今一分かっていない。普通に目が覚めたと思ったら何かの気配を感じて、朝ご飯を食べ終わったら何かに呼ばれている様な気がして、外に出た瞬間何かに引き寄せられる様な感覚になって、俺を引き寄せている場所に向かって森を歩いているんだ。

正直な話、今迄こんな事は転生して一度も無かった。

だから何故、体が勝手に動いているのか未だに理解していない。

「ハア……ハア……」

朝から歩きっぱなしで一度も休みを取っていないので呼吸が荒くなっているが、体は俺の言う事を全く聞かず止まってくれない。

な、何で体が言う事を聞かないんだよ……！？

ま、まさか、この前封印した三尾の所為なのか！？

俺は三尾の事を思い出して体が言う事を聞かない理由に予想が出たので、目を閉じて精神世界に行く様に心を落ち着かせた。

三尾が体を操っているなら、目を閉じていても平気だし第一に俺の体の自由を奪った理由を聞かないとならねエからな。

俺は心を落ち着かせていくと、五感を全く感じなくなって意識が遠のいていく。

そして俺は、完全に意識を手放した。

.....

.....

.....

「.....ワ〜〜オ。」

「.....いい加減なりアクションだな。」

俺は志村けんさんの様なリアクションをすると、檻の中で俺のリアクションを見ていた三尾がツツコンできた。

まあ流れで分かると思うが、俺は今精神世界に来ていて三尾と向かい合わせになって立っているんだ。

「まあ言いたい事はお互い沢山在ると思うが、交互に簡単に質問し簡潔に答え合おうぜ？」

「.....嗚呼。」

俺は少し苦笑いしながら三尾に提案すると、三尾は少し間を開けて了承してくれた。

三尾は尾獣の中で数少ない人間と和解した尾獣、原作では余り描かれていなかったが裏設定をタクミから散々聞かされていたので頭に残ってるんだ。

「先ず俺から質問するぜ？」

「構わん。」

俺がそう言うのと三尾を直ぐに応えたので、俺は唾を飲み込んで緊張した心を落ち着けた。

そして、

「お前は三尾か？」

「お前の目は何も見えてないのか？」

真剣な顔をして質問したら、無表情？で見事な迄に馬鹿にされた。否さ、尻尾の数がその尾獣の呼び名？なのがこの世界の常識らしいが、確認の為に聞いたって良いよな？

俺は全ての尾獣を知っている訳じゃ無いし、原作でも尾獣を見た事が余り無かったからな。

「馬鹿な質問でも約束したから答えてやる、三尾だ。」

三尾は溜め息を吐いて呆れた声で俺の質問に答えてくれた。良かった、前から三尾って言うてたけど違ってたらかなり恥ずかしいからな。

「次は俺の質問だ、何故お前は俺を封印した？」

「運悪くお前と出会ってしまい、アマルを守りたかったからお前と戦って、勝ち目が無かったから俺自身の体に封印した。」

何となく質問される内容は予測出来ていたので、俺は間を開けずに三尾に答えた。

正直な話、最初はアマルと協力すれば勝てると思ってた。だけど三尾は尾獣、幾ら半チート能力&原作知識六割保持の転生

者の俺でも、尾獣相手に勝てる訳が無かった。

なので俺は自分自身の体に三尾を封印した訳だ。

「……………そうか。」

俺の答えを聞くと三尾は少し嬉しそうな、だが少し悲しそうな声でそう言った。

「嗚呼そつだ。じゃ、次は俺の質問……………否、頼み事だな。」

「……………俺に何を頼むつもりだ？」

「三尾と……………友達になりたいんだ。」

「女みたいな言葉が言いたかったら寝てから言え。」

俺が三尾の目を真剣に見てそう言つと、三尾は冷たい目？をしなから俺にそう言ってきた。

な！？

こ、此奴、なのはの名言を言われて冷めた……………だと？

大抵の奴なら、こう言ったら友達になつてくれたんだぜ。

現にチヨウジ達にこう言ったら友達になつたしな。

……………人間じゃないと効果が無いのか？

「まあ気分を悪くした事に関しては謝る、悪かった。……………だけどよ、お前と友達になりたいのは本心なんだ。」

俺は素直に頭を下げた謝り、そして顔を上げて握り拳を作りながら三尾にそう言った。

人間と尾獣、仲良くせずに生きていたって悪い事ばかり。

人間と尾獣が仲良くなつて生きれば、逆に良い事ばかり。
だから俺は、この世の人柱力と尾獣には互いに仲良くなつて貰いたい。

八尾は原作通りなら仲良くなっているし、九尾は俺・タクミ・なのはが原作ブレイクをしたので一部だけはあるが仲良くしている。一尾とは未だ会った事が無いからどうなるか分からないし、その他の人柱力はどんな性格なのかも分からないのでどうなるのか検討も付かない。

だけど、人間と尾獣、殆ど違うが心はちゃんと存在するし話し合えばちゃんと分かり合える。

俺はそう信じたい、ナルトと九尾・ビーと八尾の様な関係になる事を。

「…………それは保留だ、俺はお前の事を何も知らない。だから、これからのお前を見て決めさせて貰う。」

「…………分かった。」

三尾の答えに俺は少し間を開けて返事をした。

三尾は前の人柱力と和解していたがそれは互いの事を分かり合っていたから、俺と三尾は出会って未だ間も無いので未だ期待の出来る答えだったので俺は了承した訳だ。

「…………最後の質問だ。…………お前、この里にもう一人の人柱力が居る事は知っているか？」

「ん？…………あ、嗚呼、確か六尾だろ？…………それがどうしたんだ？」

「…………お前に最初の試練を与える。」

三尾がそう言っ て来たので、俺は余りにも突然過ぎる言葉に驚いて茫然としてると、視界がドンドン白くなって行つた。

俺は三尾に試練などに付いて質問しようとしたが、声が全く出ずに視界が完全に白くなつた。

.....

.....

.....

.....

「.....大丈夫かい？」

「.....」

“開いた口が塞がらない”とは正にこの事だ。

俺は精神世界から無理矢理現実世界に帰され、閉じていた目蓋を開けると目の前には一人の青年が立っていた。

普通の青年なら驚かない、普通の青年ならな。

「瞬きや呼吸はしてるから大丈夫だね、急に現れるから驚いたよ。」

青年は俺にそう言つて、少し安心した顔をして息を吐いた。

.....三尾、お前の言っていた試練って何だよ？

六尾の人柱力さんと一体何をしろと言うんだよ？

第貳拾参話の巻（後書き）

次回は少し番外編（クリスマス編とお正月編）を書こうと思っています。

次回もお楽しみに！

番外編の巻（前書き）

明けましておめでとう御座います！！

この話はモトキが旅に出る前の年のクリスマスと、旅に出る年の正月なので。

しかし、こう書いていったらなのはがメインヒロインになるんだよな。

ハーレムを目指しているが、一人一人を書くのは難しいな……

誤字・脱字・変な所が在れば教えて下さい！

番外編の巻

クリスマス編

sideモトキ

俺は今、なのはと一緒にクリスマスと言う事でブラブラと適当に里を歩いている。

ナルトとタクミは日向家に呼ばれていてヒナタやハナビ達とパーティー、シカマル・いの・チョウジは旧家の繋がりって感じで三家でパーティー、サスケはうちは一族でパーティー、キバとシノは分かんが多分パーティーだろう。

とまあ、俺以外はパーティーに呼んだり呼ばれていたりしていたので、結果的に唯一暇してたなのはと過ごしている訳だ。

まあナルトやサスケ、いの達からパーティーに誘われていたのだが、俺が行って気を使わせるのも嫌だったので断った。

予定も無かったので、適当に里を歩いてたらなのはと出会って、其処から一緒に行動している訳だ。

「しかし、何故『NARUTO』の世界にクリスマスが在るんだ？」

「別に在っても良いと思うよ。モトキ君と一緒に過ごせる訳だし！」

俺は雲で覆われた空を見ながら疑問に思った事を言うと、なのは笑顔で俺にそう言って俺の腕に抱き付いてきた。

なのはに文句を言おうとしたが、クリスマスに注意するのもなっと思って今日だけは目を瞑って注意するのを止めた。

しかし、転生して色々在ったな……

最初は戸惑う事ばかりだったけど、日が経つ事に連れて慣れていって友達も出来た。

自分の力で誰かが救えるって分かって、勇気を持って原作プレイクが出来た。

死んだって事にはショックを受けたが、こんな楽しい日々が送れるのは全部なのはのお陰なんだよな……

「……なのは、」

「どうしたの？」

「ありがとな。」

「……ふえ？」

俺はなのはの顔を見て真剣な顔をしてお礼を言うと、なのはは何が何だかサッパリと言う顔をしていた。

だが直ぐに俺の顔を見て頬笑みながら「どういたしまして。」と言って、俺の腕に更に密着してきた。

すると突然、空から白い物体が降ってきた。

「「雪……だな（だね）」」

俺となのはは同時に空を見て降ってきた物体の名前、雪と言った。雪か……クリスマスに降ったから今日はホワイトクリスマスだな。

ロマンチックって言う言葉がピッタリなんだろうが、俺には似合わない言葉だしこう言うのは女の子が言う言葉だろ。

「ロマンチックだね……」

「……嗚呼、綺麗だな。」

「……好きな人と見てるから倍以上ロマンチックになるよ。」

「ん？何か言ったか？」

「な、何でも無いよ！／＼／＼」

なのはが小さい声で何かを言ったので俺は聞いたが、なのはは何故か赤くなった顔を横に何度も降って否定した。

顔が赤いのは寒くなったから赤くなったのだろう……だが、何故其処迄否定するんだ？

うゝん、此処迄否定してたら絶対に何か言った筈なんだよな。

でも、本人は言いたくないから否定してるんだと思うし……まあ気にしてたらダメだな。

さて、言い遅れたが……

「メリークリスマス、なのは。」

「メリークリスマス、モトキ君！」

俺達は笑い合ってそう言い、ホワイトクリスマスを何だかんだ言って楽しく過ごした。

お正月編

sideモトキ

「「「新年、明けましておめでとう御座います。」」」

俺・父さん・母さんは頭を互いに下げ合って、新年が明けた挨拶をした。

まあ年が明けた事は良い事なんだが、我が家はこれと言って特にする事も無い。
強いて言うつとすれば、昼飯が正月らしくなるんだ……朝飯は無いんだけどな。

「家に居ても暇だから、神社にでも行ってくるよ。」

「気をつけるよー。」

「お昼ご飯迄には帰って来なさいねー。」

俺は両親にそう言って玄関に向かうと、父さんと母さんがリビングから俺にそう言って来た。

俺は少し大きな声で「分かった。」と言って、靴を履いて扉を開けて外に出た。

外に出ると里はお正月色に染められていて、外に出てる人は正月らしい格好をしていた。

俺の格好は冬服の私服だぜ、だって着物とか寒いし動き難いし着るのが面倒臭いじゃん。

そんな事を思いながら歩いていると、十字路に出た。

「……あつ……」

すると前の道以外から俺の顔見知り達が歩いていて、俺達は思わず互いの顔を見て声を出した。

俺から見て右側の道からはタクミとヒナタ・ナルトとハナビと言うカップル組、俺から見て左側の道からはサスケ・いの・シカマル・チョウジ猪鹿蝶・なのが歩いてきたんだ。

……此処にシノとキバが居たら、何時ものメンバー略してイツメンになるんだろうが、流石に其処迄揃う筈は無いか……

「お前等、まさかと思うが神社に行くつもりか？」

俺は余計な事を思いながら皆に聞くと、皆は首を縦に振って肯定してきた。

おいおい、何でこう俺達は考える事が一緒なんだよ……？

イツメンだからか、それとも余計な部分は心が繋がっているのか……？

「モトキ君、一緒に初詣に行こ！」

「ず、ズルいよなのは！も、モトキ、私と一緒に行こう！」

するとなのはが俺の右腕に抱き付いてきてそう言ってきたが、何故かいのも対抗意識を燃やして俺の左腕に抱き付いてきてそう言ってきた。

全く、好きでも無い男にするなって何度言わせれば気が済むんだ

よ……

しかも、何故か皆は俺達を暖かい目をしながら見てくるし……時々此奴等の考えている事は分らん時が在る。

「此処でジツとしてる時間が勿体無い、さつさと初詣に行くぞ。」

俺は必要最低限の動きでなのはといのの拘束を解いて、歩きながら皆にそう言つと皆は苦笑いしながら頷いてくれた。

なのはといのは「うー」っと顔を下に向けて唸っていたが……何故だ？

……

……

……

……

「「「……多いな。」」」

俺達は神社に来ている人の数を見て、少し呆れながら声を揃えてそう言った。

否、年明けだから初詣は沢山居るんだろうなーって予想はしてたさ、予想はしてたけど現実には予想を遥かに超える人数なんだよ。

……もしかして、里の人の八分の一は来てるんじゃないか？

「まあ俺達には全く関係は無いがな。」

すると突然、サスケは不気味に笑いながら俺達にそう言つて来た。

…… 一体何をする気だ？

「父さんから教わった幻術をつく」「アウトー！！」「へブシッ！」

サスケが写輪眼を発動させて幻術を使おうとしたので、俺とタクミはサスケの頭を叩いて使うのを防いだ。

何で初詣に来て幻術を使おうとしてんだよ、原作のサスケは一体何処に行ったんだよ……

「馬鹿なサスケは放っておいて、さっさと列に並ぼうってだよ。」

ナルトは俺達にそう言っただけに並びだしたので、俺達はナルトの言う通りにナルトの後ろに並んで列に並んだ。

さて、この人数だと何時間待つ事になる事やら……

………

………

………

………

「やっと…… やつと辿り着いた。」

俺は賽銭箱の前にやっと来れたので、俺は溜め息を吐いてそう言った。

大体二時間半位は待ったな、ずっと立ちっぱなしだったから足が痺れてるんだがな……

「さうて、速く金を入れようぜ！」

タクミがそう言って来たので、俺達は頷いて財布の中から小銭を出した。

小銭を入れるのにもルールが在った様な気がするが、俺達はその知識は全くと言って言い程皆無だから特に気にしない。

俺達は小銭を賽銭箱に投げて、適当に鈴を降って両手を合わせた。さて、皆は何を願うのかは知らないが、大体予想は出来るからまあ良いか。

神様に願い事を願うって行事なんだが、元神様は俺の隣に居るから余り実感は無いしな……

でもまあ、願う事は無料^{タダ}なんだし、初詣に来たんだから願うていくか。

……… “もう直ぐしたら、旅に出る許可を貰いに行くので、無事に旅が出来ます様に” …… これで良いか。

「モトキ君らしいね。」

「……人の心を勝手に覗いて、願いを読みやがったな。」

なのはが笑いながら俺にそう言って来たので、俺はなのはの頬を引っ張りながらそう言った。

なのはは涙目になりながら痛がっていたが、俺の願いを勝手に読んだので俺はなのはの頬を引っ張りながら皆が居る所に移動した。

皆はお神籤を買っていたので、俺はなのはの頬を引っ張るのを止めてお神籤を買った。

『中吉』

『旅行……色々な出会いがあるので、しっかりと準備しましょう。』

『勉強……何をやっても上手くいくでしょう、しかし油断は禁物です。』

『恋愛……沢山の人に好意を持たれてしまうので、気をつけましょ
う。』

『健康……無理をしすぎて冗談抜きで死ぬかもしれない、自分第一
の気持ちを。』

中吉……か、しかもスツゲエ未来に起こりそうな事が書かれてる
し。

此処の神社のお神籤は当たりそうだな……

「ムムム、沢山の人に好意を持たれるって書かれてる……」

するとなのはというのが、俺を挟んで俺のお神籤を見てそう呟いた。
……恋愛の部分は外れだな、俺みたいな奴を好きになる子なんか
居ないからな。

「其処の三人、待ち時間が長かったんだから早く帰って飯を食べよ
うぜ。」

するとシカマルが怠そうな顔をしながら俺達に言ってきたので、
俺達は頷いて神社を後にした。

さて、腹が減ったから早く帰ろう。

番外編の巻（後書き）

次回は本編に戻り、六尾との交流の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第貳拾四話の巻（前書き）

明明後日から学校が始まる……はあ、鬱だ。

学校が始まるので、更新が遅れるor出来ないかもしれません。

ご了承下さい。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第貳拾四話の巻

sideモトキ

六尾の人柱力・ウタカタと出会って大きな事件も無く四日が経った。

ウタカタとは四日間ずっと一緒に居て、今ではすっかり親友に成れた。

ウタカタは人柱力と言う事で里から姿を隠せと言われていたので、こんな誰も寄って来ない森の奥に居たらしい。

まあ俺も三尾の人柱力だからウタカタと仲良く成れたのかもしれないが、やはり話してみれば結構面白い奴だった。

三尾は俺に一体何をさせたかったのかは分からなかったが、ウタカタと仲良く成れたから気にしないでおこう。

俺とウタカタは今、誰も居ない滝にやって来て新しい忍術の特訓中だ。

ウタカタの戦い方は俺の知らない戦い方で、模擬戦を一回するだけでスツゲエ経験値が得られる。

なので、俺はウタカタに忍術を教えて貰う為に滝にやって来たんだ。

「……うん、かなり良い感じに忍術を使ってるね。これも南雲一族の血筋なのかな？」

「否、ウタカタの教え方が上手いから使えるんだよ。後、血筋は全く関係ないから。」

ウタカタが苦笑いしながら言ってきたので、俺は直ぐにウタカタが言った事を否定した。

ウタカタは少し謙遜してる部分が多いんだ、自分が取った獲物も

俺のアシストが良いとかって言うし……

後、南雲一族はうちは一族や日向一族には適わないが、意外にも他里には認知されてるらしい。

ウタカタ曰く、「第三次忍界大戦で木の葉の南雲一族の一人が活躍した」から認知されているらしい。

その人は“無殺の灼熱”って言う名で言われてたらしい。

何でも、その人物の髪の毛の色が灼熱の炎の様な紅い色で、第三次忍界大戦で一人も殺さなかったらしい。

俺は両親や同じ南雲一族からはそんな話を聞かされた事は一度も無かったのでウタカタに初めて聞かされた時は信じなかったが、ウタカタが何度も言うので半信半疑に成りながらも信じた。

髪の毛が同じ色だから、俺が忍術などを成功させる度にそう言うてくるんだよ。

「でも、本当に嬉しいな。」

「何がだ？」

するとウタカタが本当に嬉しそうな顔をしながら俺を見て言ってきたので、俺は印を結ぶのを止めてウタカタに聞いた。

「あつ、いや、誰かとかうやって過ごすのは何年振りだから、本当に嬉しくてね。」

「……ウタカタ……」

「六尾の人柱力に成って色々辛い事が在ったけど、生きていれば楽しい事だつて在るって分かったしね。」

「……六尾とも和解出来たら、もっと楽しく成るぜ。」

俺がウタカタにそう言うと、ウタカタは一瞬驚いた顔をしたが直ぐに何時もの顔に戻って「そうだね。」と言ってシャボン玉をパイプを使って吹き出した。

そっだよ、誰も尾獣と和解したくないって言ってない。

寧ろ、里の目を気にして心の中では尾獣と和解する事を望んでいる人が居る。

その人達となら、ウタカタと仲良く成れる筈なんだよ！

「ウタカタ、今日から一緒に尾獣と和解していこうぜ！」

「えっ、でも未だ教えてない術とか……」

「そんなの後だ後！ “思い立ったが吉日”、頑張って和解していこうぜ！」

俺はウタカタの手を握ってそう言うと、ウタカタは戸惑いながらも了承してくれた。

三尾の試練は、ウタカタと六尾を和解させるって事なのかもしれないな……

良いぜ、時間は未だ未だたっぷり在るんだ。

どれだけ時間が掛かったとしても、絶対にウタカタと六尾を和解させてやる！

あつ、でも白達には未だ一度も連絡を取ってないから、後で影分身を送らないとな。

心配させる……って、もう四日も留守にしているから心配してるか

……

後回しじゃなくて、急いで影分身を送ろう。

第貳拾四話の巻（後書き）

次回は時間がかかなり飛び、久し振りに旅の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

第貳拾伍話の巻（前書き）

Wiki先生頼みなのに、どうも上手く纏まらない。

それにしても……どうしてこうなった？

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

第貳拾伍話の巻

sideモトキ

「卍解、緋緋王蛇尾丸！！」

俺は蛇尾丸を卍解して緋緋王蛇尾丸にし、緋緋王蛇尾丸を操って俺達の前に居る山賊達を凧ぎ払って行った。

緋緋王蛇尾丸の攻撃を喰らった山賊達は、腕が足がモゲて其処から血が吹き出して血を出しながら逃げたり、頭がぶっ飛んだり上半身と下半身が別れて死んだりしていた。

そして暫く緋緋王蛇尾丸を操っていると、山賊達は逃げたり死んだりしてこの場から居なくなつた。

「……もう出て来て良いぞ。」

俺は緋緋王蛇尾丸の卍解を解き普通の日本刀にして消し、後ろを向いて大きな岩に向かってそう言った。

そして少しすると、アマル達が警戒しながら岩の陰から出て来た。

「……大丈夫か、モトキ？」

「嗚呼、攻撃を一度も受けていないから無傷だ。服に付いている血は全部山賊の血、安心しろ。」

アマルが心配そうな顔をしながら聞いてきたので、俺は血の付いた服を脱いで口寄せで新しい服を出して服を着ながらアマル達にそう言った。

ウタカタと別れて既に10日が経ち、俺達は湯隠れの里に向かつ

て旅をしている。

ウタカタは六尾との和解が無事に出来た、出来たと言ってもナルトと九尾の様な感じだから半分なんだがな……

六尾も最初は九尾の様に殺気を放ってウタカタを拒絶していたが、毎日の様にウタカタは六尾の所に行き和解する為に話し続けたので六尾と和解出来た。

ウタカタが和解出来たのと同時にウタカタの師匠のハルサメさんが現れて、ウタカタが喜びながら六尾と和解した事を話したらハルサメさんは涙を流してウタカタを抱擁した。

何でも、ハルサメさんは病気に成って此処何日かは家で寝込んでいて、病気が治ったので直ぐに此処へ来たらしい。

ハルサメさんは俺に何度もお礼を言って何かしたいと言って来たが、俺は自分がしたかったと言って遠慮した。

そしてハルサメさんも含めて俺達三人は互いに忍術を教え合っていたら、影分身の一体が突然消えて記憶や経験値が還元された。

記憶では一人の少女を保護したらしいのだが、その少女は原作キヤラでかなり衰弱しているらしい。

今はもう一体の影分身がその子を介護しているが、このままだと衰弱して死んでしまう。

今は影分身が応急手当程度の事をしているが、もって後一ヶ月らしい。

なので俺はハルサメさんとウタカタに事情を話して別れを告げ、直ぐに家に帰ってアマル達に事情を話して身支度をして湯隠れの里に向かっているんだ。

後少しで湯隠れの里と言う所で、山賊が現れて襲い掛かって来たので冒頭部分で倒した訳だ。

「それにしても、最近山賊達がよく出る様に成りましたね。」

すると白が山賊の死体を見ながらそう言って来たので、俺は無言

で頷き肯定して血の付いた服を印を結んで“火遁・鳳仙花の術”を使つて燃やした。

身元がバレる様な物は直ぐに処分しないと、俺だけでなくアマル達にも危険が及ぶからな。

「…………急ごう、こうしている間にも苦しんでいる奴が居るんだからな。」

俺は服を燃やし終えてそう言うと、皆は頷いてくれて俺達は急いで湯隠れの里に向かった。

……………

……………

……………

……………

「待つてたぜ。」

俺達は火影様から貰つた許可書を見せて湯隠れの里に入り、記憶を頼りに歩いていると影分身が宿屋の前に立つていて俺達にそう言つて来た。

影分身が黙つて宿屋に入つて行つたので、俺達は急いで影分身の後を追ひ掛けた。

そして影分身が一つの部屋に入つたので俺達も入ると、部屋には布団で寝ている赤髪の少女が居た。

「俺が出来る最大限の事はやつた、後は頼む。」

影分身は俺にそう言って消えて、俺に記憶と経験値がまた還元された。

……影分身は医療忍者顔負けの応急手当をしていて、更に高等医療忍術迄マスターしてるよ。

でも使わなかったのは、自分では少女を救えないって分かったたからか……

「それじゃ、アマル、白、氷麗さん、今からこの子を救うから力を貸してくれ。」

「『勿論！』」

俺が三人に頼むと三人は間を空けずに応えてくれたので、俺達は荷物を部屋の隅に置いて少女を救う為に準備を始めた。

絶対に救ってやる、だから後もう少しだけ踏ん張ってくれよ……多由也！

第貳拾伍話の巻（後書き）

それにしても、後は誰が救えるんだろうか？

次回は日常の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0977u/>

NARUTO 紅と碧の運命を変える転生者達

2012年1月14日16時47分発行